

# アフリカ社会主義の理念と現実

——タンザニア独立後の歩み——

ウフルー研究会（古沢紘造、古沢貞子、半沢和夫、佐藤正市、牛久保滋、五十嵐暁郎）

## 解 題

ここに訳出したのは、タンザニア連合共和国の大統領ニエレ  
 ン (Julius K. Nyerere) と、かれが率いる T A N U (Tanganyika  
 African National Union・タンガニーカアフリカ人民族同盟) によ  
 って発表された、この国にとってもっとも重要な三つの文書で  
 ある。いずれもタンザニアが独立後、重大な時期にさしかかっ  
 たときに、国家がとるべき政策と方向について国の内外にむけ  
 て発せられたものであり、各々この国のその後の歴史に影響を  
 及ぼしている。各文書の背景などについて解説しなければなら  
 ないが、その前に、まずタンザニアについて簡単な説明をして  
 おくべきであろう。

タンザニアはアフリカ大陸の東部に位置し、その国土は南緯  
 一度から一一度四五分、東経二九度二一分から四〇度二五分に

広がっている。文字どおり赤道直下の国である。面積は九四方  
 五〇八七平方キロメートルで、日本の約二倍半である。北はケニ  
 ア、そしてビクトリア湖をはさんでウガンダに接し、西はルワン  
 ダ、ブルンジに、南はマラウィとモザンビークに、そして東はイ  
 ンド洋に面している。地形は、インド洋に沿って九〇〇キロメー  
 トルちかくのびている帯状の海岸線をのぞき、全土海拔三〇〇  
 メートル以上の高地をなしている。北にはキリマンジャロ山が  
 そびえ、ウサンバラ山脈は海拔二二〇〇メートルの高原をなし  
 て北から南へ国土の中央部を貫き、マラウィ湖にたっている。  
 インド洋にはザンジバル、ペンバなどの島々が点在している。

熱帯圏に属するので、年間をつうじて日照度は非常に高い。  
 しかし気温は海岸地帯が高温多湿の典型的な熱帯性気候である

のたいして、内陸部の高原・山岳地帯は湿度も低く涼しい。例年、三月から五月にかけての大雨期と、十一月から一月にかけての小雨期があり、大雨期には年間雨量の二分の一ちかくの降雨がある。農民はこの季節を中心に農作物を栽培する。乾期には雨はほとんど降らない。

人口は約一五六〇万人で、バンツー系の諸部族が共存しており、いずれかが支配的地位にあるということはない。宗教的にはイスラム教徒が三三%、キリスト教徒が二五%のほかは伝統宗教を信仰している。公用語はスワヒリ語である。農業国であり、とうもろこし、もろこし(ソルガム)、バナナなどの主要食料のほかに、コーヒー、綿花、サイザル麻などの輸出用農作物を栽培している。鉱産物はダイヤモンドが農作物について輸出額の第三位を占めているのをのぞくと、ほかにはとりたてて言うほどのものはない。

タンザニアの歴史は数多くの屈折を経験している。インド洋に面しているために、すでに古代から、都市文明のさかえた中近東やインド、アラビアから、人々は季節風に乗ってこの地をおとずれていた。交易とともに文化的交流や人種的混血が行なわれ、六世紀ごろにはスワヒリ文化圏とスワヒリ語が生まれた。一〇世紀ごろには、内陸部もほぼ今日見られるような種族の分布が定着した。

やがて同じ海をわたって、ポルトガルやイギリスやドイツなどのヨーロッパ諸国の船が姿をあらわした。植民地争奪に狂奔

していたこれらの国々のうち、この地を手にしたのは新興ドイツであり、やがてそれまで海岸地帯を支配していたアラブ人も駆逐して、一八八六年、タンガニカはドイツ領東アフリカとなり、その後七五年にわたる植民地時代がはじまったのである。

宗主国ドイツが第一次大戦に敗れると、一九一九年からはかわってイギリスの国際連盟委任統治領となり、ついで第二次大戦後は国連信託統治地域として引続きイギリスの施政下におかれた。しかし第二次大戦後インド、パキスタンをはじめアジアにおこった民族主義の波が、インド洋をわたってエジプトへ、そして東アフリカにもうち寄せてきた。一方、やはり戦後にアフリカ人の連帯を主張した「パンロアフリカニズム」も、この植民地支配に耐えつづけてきた大陸をゆり動かしていた。こうして一九五七年、はじめての黒人国ガーナがアフリカ大陸の一角に出現した。

タンガニカにおいても第二次大戦後、民族主義運動は急速にひろがっていた。その中心組織となったのはTAA(タンガニカ・アフリカ人アソシエーション)であったが、一九五三年その会長に就任して運動を指導しはじめたのが、イギリスでの留学生活から帰国したニエレレであった。ニエレレは一九二二年にビクトリア湖に近いブティアマ(Butiama)村で小部族であるザアナキ(Zanaki)族の族長の家に生まれ、ウガンダのマケレレ大学を卒業後、タボラ(Tabora)のセントメリー学校で二年間教職についたのちにエジンバラ大学へ留学していた。

ニエレレは会長就任後ただちにTAAを改組して、民族主義を推進する大衆組織に発展させることを主張し、翌五四年に前述のTANUを発足させたのである。TANUは植民地政府によるさまざまな妨害を乗り越えて運動をひろげ、民衆の圧倒的支持を獲得していった。とりわけ五八年、六〇年の立法審議会総選挙においてTANUは決定的な勝利をおさめ、独立への歩みは急ピッチとなり、ついに一九六一年一月九日、タンガニカは独立を達成した。一九六四年には革命により共和国となったザンジバルと連合し、タンザニア連合共和国となり、ニエレレは独立後TANU一党制の議会を指導して大統領に三選され、今日に至っている（在タンザニア日本国大使館編『タンザニア連合共和国』一九七四年、日本国際問題研究所、吉田昌夫『アフリカ現代史Ⅱ』一九七八年、山川出版社、参照）。

しかしながら政治的な独立は、ニエレレ自身も言っているように完全な独立ではなかった。一九七一年TANU大会での報告「独立後十年」(Ten Years After Independence, 1971, in Freedom and Development, 1973; Oxford University Press)のなかで、ニエレレはこの十年が国家活動のあらゆる側面において、真の独立と「自由」のための苦闘の連続であったことをのべている。また、この報告のなかでニエレレはタンザニア独立後の時期区分を行っており、それによればこの十年間は、(1) 他人によって支配されていた屈辱を自覚し「ウフルー」(自由)を求めた七年間(六一〜七一年)(2) 国家形成の構想を模索した五

年間(六七〜七一年)(3) 真の独立と民族的自主性の獲得を国家の目標として掲げた七一年以降、と三つの時期にわけられている(ibid., p.333)。ここでわれわれが訳出した三つの文書は、ニエレレによるこの三つの時期の各スタートにあたって発表されているのであり、この点からも冒頭でのべた、これらの文書がもっている重要性が推測されるであろう。つぎにこれらの文書が発せられた背景とその内容について解説しよう。

### 1 ウジャマー(Ujamaa)

独立の翌年一九六二年の四月に首都ダル・エス・サラームにあるTANU党員の養成学校キブコニ・カレッジ(Kivukoni College)で行なわれたニエレレの演説である。このなかでニエレレは、新しい国家を形成する理念すなわちタンガニカの社会主義とは何か、を表明している。

そのことは冒頭の「社会主義とは精神のあり方(an attitude of mind)である。」という一文に凝縮されているといえよう。ニエレレのいう社会主義は、アフリカの伝統的社会に存在した社会秩序であり、その共同体の成員全員の労働の成果にもとづく平等社会というように要約できるであろうか。その立場から、ニエレレは仲間を搾取する階級社会である資本主義的秩序を批判している。その批判は原理的、根底的であり、「教師」(スワヒリ語で「ムワリム」)とあだ名されるにふさわしく、含蓄をこめて語りかけてくる。

ニエレレは、この伝統的社會主義を強調し、また階級闘争を理論の基礎とするヨーロッパの社會主義との性格の相違を明らかにするために「Ujamaa」という概念を用いている。この文書のスワヒリ語版は、英語を理解しない一般民衆のために書かれているが、そこでは最初に出された英語版の「Socialism」は、すべて「Ujamaa」と表現されている。スワヒリ語で jamaa は「家族」の意味である。「U」は名詞の冒頭に付されると、その語を抽象名詞化する。(たとえば「moja」は数字「一」であり、「umoya」は「団結」(unity)の意味になる。)したがって「Ujamaa」は「大家族の精神」と訳せるだろう。ニエレレ自身「Ujamaa」を「Familyhood」と等置している。(UJA MAA: Essays on Socialism, 1968; Oxford University Press, p. 12) 家族成員相互の愛情が生み出す平等でたがいに助け合う平和な社会、それがニエレレの主張する「社会主義」なのである。(林晃司「タンザニアの『社会主義』化」『アジア経済』一九七一年三月号、吉田昌夫、前掲書二二七頁、岩城剛「アフリカ自立発展の理念」『アフリカ』一九七〇年一〇月、参照)

## 2 アルーシャ宣言 (Azimio La Arusha)

独立とウジャマア演説から約五年後の一九六七年一月二九日、キリマンジャロにちかいアルーシャで開かれていた T A N U 大会の席上、ニエレレによって提出され、討議をへたのち公表された。この「宣言」によってニエレレは、独立後の経過を

反省して国家と党の体勢をたてなおし、タンザニア社会主義実現のための具体的政策をうち出したのである。

その背景を見ると、まず外交面では、六四年ザンジバルとの合併に際して、それまでタンガニカは西独をザンジバルは東独を承認しており、いずれをとるかが問題となったが、最終的にはダル・エス・サラームに東独の総領事館を設置することになった。この決定にたいして西独はタンガニカへの援助を解約した。翌六五年には、ローデシアにスミス政権を中心とする白人少数派が内外のアフリカ人の意志を無視して一方的に独立を宣言した。これにたいして英連邦諸国はローデシアにたいする武力制裁を主張したが、英連邦の盟主であるイギリスは経済制裁を行なうにとどまった。このイギリスの態度を不満とするタンザニアは、かつての宗主国であり独立後も貿易・援助の最大の相手国である英国との外交関係を断つという行動をとった。その結果、ニエレレはじめタンザニアの思想的高潔さは賞讃されたが、第一次五カ年計画にたいする英国からの借款七五〇万ポンドは打切られることとなった。

このほかにも国外からの資金が予定どおり集まらなかったり、最大の輸出品であるサイザル麻の国際価格の暴落によって打撃をうけるといふ事件があり、ニエレレはじめタンザニア政府首脳部は海外からの援助や投資、貿易による収入の不確実性を思い知らされた。そのことは「宣言」のなかでもくりかえしのべられているし、「自助」(self reliance)の主張はこの経験を



ふまえているのである。同じころタンザニアは中国との国交を深めつつあった。ニエレレと周恩来はたがい北京とタンザニアを訪問し合い、一九七六年には中国の援助でタンザン鉄道（ウフルー鉄道）も建設された。「自助」の思想が中国の自力更生の思想の影響をうけているといわれるのも、このような両国間の関係緊密化によってある程度裏づけることができるであろう。

「宣言」の国内的背景としては、まず農業生産の順調な発展があげられる。早ばつによる不作や前述のサイザル麻価格の暴落にもかかわらず、農業生産額は確実に上昇してきた。この事実が宣言における農業の重視や「自助」の強調のうらづけになっているであろう。

しかし一方においては、独立後わずか五年にして政府や党の幹部の間に腐敗が進行していた。「アフリカ人化」の政策によって、自己の能力以上の地位につくことができた官僚たちは、企業と結びつき、また植民地時代の給与体系による破格の収入によって土地や家作を買いしめた。「宣言」の第五部は、そのような腐敗を除去するという目的をもっている。

また六六年一〇月には、ニエレレ大統領がダル・エス・サラーム大学の学生にたいして卒業後二年間は標準給与の半額で国家活動に奉仕するように求めたのにたいして、学生は、この要求を拒否し反対のデモンストレーションを行なうという事件がおきた。将来国家の重要なポストを担うかれらに労働の重要性を認識してもらいたいというニエレレの意図に反して、かれら

の間にはエリート意識が育っていたのである。このことも「宣言」第五部の背景と考えるべきであろう。

以上のような独立後の状況の根底には、いぜんとして植民地時代の遺制が残存していた。プランテーション経営が残した単一作物に依拠するいわゆるモノカルチャー農業や外国企業による経済的支配は、独立後もタンザニアの進路を制約しつづけていたのである。「宣言」が基幹産業、金融機関などの国有化政策を表明し、ウジャマール社会主義の実現——集団農場による生産体制の普及をうたっているのは、それによってこの基本的な制約を除去し真の独立を獲得するための大きな一歩を踏み出すこととしたことにほかならない。現実に、宣言が公表された直後に、外国銀行、貿易会社、主要産業部門の工場の国有化が宣言されるようになった。この年の末には工業生産の五〇％が国营企業によって生産されるようになった。外国企業や私企業の統制は準国营 (Parastatal) 機関をつうじて行なわれた。ウジャマール村も、この年から毎年ほぼ倍増の勢いを示すようになった。(農業重視は経済的理由のみならず、集団農場におけるウジャマール社会主義をつうじて国民を組織化するというねらいをもっている。この点については Socialism and Rural Development, in UJAMAA を参照。)

このように「宣言」は、「ウジャマール」の理念を実現するための具体的政策ともいうべき性格のものである。同時に、「ウジャマール」とくらべるとき、タンザニアがおかれている現実が行間からにじみ出てくる文書である。ある研究者は、この二つ

の文書をくらべて「哲学 (Philosophy) から政策 (Policy) へ」と表現している。また、この「宣言」は、「ウジャマー」がはじめ英語で公表されたのたいして、はじめからスワヒリ語で書かれ、討論されたという。このことにも、「宣言」の背景にある若々しいナショナリズムの意気込みが感じられるであろう。(林晃司、前掲論文、大飼一郎「アフリカ『社会主義』『思想』一九七三年九月号、岡倉登志「アフリカ社会主義」から科学的社会主義への発展の可能性」『アジア・アフリカ研究』一三巻七号、一四巻一、二号、一九七三年七月、七四年一、二月、参照)

### 3 ムウオンゴゾ (Mwongozo)

独立から十年、アルーシャ宣言から五年の時点で発表された文書であり、英語版の表題は「T.A.N.U. GUIDELINES」である。「ムウオンゴゾ」とは、スワヒリ語で「指針」を意味する。「ムウオンゴゾ」が発表された直接的な背景は、その内容からわかるようにウガンダにおけるクーデターであり、またより一般的に独立をおびやかしつつあった政治的、経済的圧力にたいする危機感であった。当時アフリカは、この文書の冒頭にのべられているように解放戦争やクーデター、ソ連を含む先進諸国の介入などによって世界の「火薬庫」の様相をつよめていた。「ムウオンゴゾ」が対外的危機を強調し人民軍の構想を打ちだしているのは、このような状況に対処しようとするものである。また、独立をおびやかす西欧諸国や米国の帝国主義や新植

民地主義にたいする名ざしの非難は痛烈である。

もう一つの重要な背景は、「アフリカ化」と「アルーシャ宣言」による経済分野への国家の進出とが官僚の権力を拡大し、商業ブルジョアジーとともにかれらが労働者階級や知識人などの攻撃の対象となってきたことである。また、それにつれて政府やT.A.N.U.の内部に矛盾が生じつつあった。このような事態にたいして「ムウオンゴゾ」は、あくまで国民の主体性にもとづくデモクラティックな政治が行なわれるべきであるとしている。結果的にこの文書は労働者階級の反官僚運動を支持することとなった。(岡倉登志「独立後タンザニアにおける社会経済構造の変化」二五頁)

「ムウオンゴゾ」以後のタンザニアの状況について若干ふれておくならば、今日では農民の六五%以上がウジャマー村で生活するようになったので、農村の資本主義化に歯止めがかかられ社会主義的集団農業の方向へ着実にむかいつつあるといえる。工業化もすすみ、工業製品の自給率は六一年の二五%から七四年の六七%に伸びている。

他方、外国資本はアルーシャ宣言後、逆に約三倍に増加している。主要な援助国は英国から米国、I.D.A (国際開発協会) 第二世銀、中国、スウェーデンにかわっている。七四年には石油をはじめ主要輸入物資の高騰、食糧の大量輸入、主要農作物の輸出不振で経済的に大きな打撃をうけた。外交的にはザンビア、ボツアナ、モザンビークとの経済協力 (南東アフリカ経済共同

体)をつよめている(岡倉、前掲論文)。また、七九年四月アミンに抵抗するウガンダ人民解放戦線を支援してウガンダに進出したことは、われわれの記憶に新しい。

ニエレレの思想と指導は「アフリカ社会主義」を代表するものである。状況の変化にたいして弾力的に対応していく実践的な思想でもあるために、いくつかの先駆的な試みとともに、おなじような状況下において近代化をすすめつつある近隣諸国に一つの手本を提供している。(岩城、前掲論文、二三頁)ローデシア問題でみせた民族解放運動への積極的な支援からもわかるように、アフリカはじめ第三世界の進歩的な勢力の間でも声望はたかい。その影響力はタンザニアやアフリカ大陸をこえてひろがりつつあるといえるであろう。

しかしまた一方において、ニエレレの社会主義にたいして批判的な見解も存在する。パン・アフリカニズムの代表的思想家であり、アフリカ解放運動の指導者であるエンクルマ元ガーナ首相もその一人である。ニエレレの社会主義を考察するにあたって、われわれは彼の思想の形成と発展を検討しエンクルマなど他のアフリカ解放の思想家と比較すると同時に、政治家でもあるニエレレの思想はタンザニアというアフリカ国家の自立、近代化の過程と照らし合わせながらその真価が評価されなければならぬであろう。それがわれわれのつぎの課題である。

以下の翻訳の英語版テキストにはつぎのものをを用いた。

1. Julius K. Nyerere, *Ujamaa — The Basis of African Socialism*, in *UJAMAA Essays on Socialism*, 1968, Oxford University Press.
  2. Julius K. Nyerere, *The Arusha Declaration*, op. cit.
  3. T.A.N.U. *GUIDELINES*, 1971, Printed by the Government Printer, Dar es Salaam, Tanzania
- 訳注は( )を用いた。また、スワヒリ語版と対照し、とくに表現の異なる部分を「」で示した。対照は牛久保滋が行なった。スワヒリ語版テキストはつぎのとおりである。

1. Ujamaa, "Ujamaa". Dar es Salaam. Oxford University Press. First Published 9 th December 1968
2. Azimio La Arusha, op. cit.
3. "Mwongozo wa TANU" 1971  
Kimepigwa chapa na Mpigachapa Mkuu wa Serikali Dar es Salaam.

翻訳はウフルー研究会のメンバー全員が討論をつうじて行なわれた。各訳文の末尾にその訳文の担当責任者の氏名を記した。

翻訳にあたっては、浦野起央氏(『アフリカ政治関係資料集成』一九六九年、アフリカ協会)、刈部ゆり子氏(『アフリカを学ぶ雑誌』三号一九七一年、理論社)、林晃史氏(『アフリカの独立』一九七三年、平凡社)の訳を参考にさせていただいた。ここに記して感謝する次第である。

また、3の英語版のパンフレットを提供して下さったタンザニア大使および大使館員諸氏、おなじくスワヒリ語版を提供して下さった吉田昌夫氏に感謝する次第である。(五十嵐 暁郎)

## 1 ウジャマー (Ujamaa)

——アフリカ社会主義の基礎

一九六二年四月TANUパンフレットとして公表

社会主義 [Ujamaa] は——民主主義と同様に——精神のありようである。社会主義社会において人々がおたがいの幸福に配慮し合うために必要なのは、社会主義 [Ujamaa]——以下同様——的な精神態度であって、模範的な政治様式をかたく守りつづけることではない。

本稿の目的は、そうした態度を検討することにある。現代社会において、それを具体化するために必要な諸制度を論じようとするものではない。

社会についてもおなじことがいえるが、個人において社会主義者を非社会主義者から区別するものは精神のありようである。財産のあるなしは問題ではない。貧乏人も、潜在的には資本家——自分の仲間を食い物にする人間——になる可能性をもっている [資本家的な心をもちうる]。同様に億万長者も社会主義者になりうるのであって、その場合、彼はそれが友人のために役立てられるものとしてのみ、自分の財産の価値を認めるであろう。しかしながら、友人の誰かを支配しようとして富を利用する人間は資本家である。また、できることならそうしたいと思っている人間も同様である。

私は、億万長者が立派な社会主義者になりうると思った。だ

が、社会主義者である億万長者などという人間にはめったに目にかかれない。実際、それはほとんど矛盾した言葉でさえある。いかなる社会であれ、億万長者がいるからといって、それがその社会の豊かさを証明するものではない。アメリカ合衆国のような豊かな国々とまったく同じように、タンガニーカのよいうな極めて貧しい国々でも億万長者は生みだされうる。なぜなら、億万長者を生み出すのは、生産の効率でもなければ国家における富の総量でもないからである。それは生産されたものの不平等な分配である。社会主義社会と資本主義社会との基本的な違いは、富を生産する方法ではなくて、富が分配されるその方法にある。したがって、億万長者が立派な社会主義者になりうるとしても、社会主義社会が億万長者を生み出すことはありえないであろう。

ある社会に億万長者が出現するということがその社会の豊かさによるものではないとするならば、社会学者たちは、なぜアフリカのわれわれの社会が実際に億万長者を生み出さなかったのか、という理由を明らかにすることに興味を見い出すかもしれない——というのも、われわれはたしかに少数の億万長者を生み出すだけの富は持っていたからである。私は、社会学者たちが伝統的なアフリカ社会の組織——生産された富の分配方法——には億万長者を寄生させるような余地がなかったのだということを見いださだろうと思う。「社会学者たちは、なぜアフリカのわれわれの社会が億万長者を持っていないのかを調査の



結果知るとき、おどろくであろう。」もちろん、社会学者たちはまた次のようにいうかもしれない。すなわち、その結果アフリカは地主のような有閑階級を生み出しえなかったのであり、それゆえにまた、資本主義社会が誇るような芸術作品や学問を創造する人間も現われなかったのだと。しかし、芸術作品や学問の成果は知性〔頭の中の生産物〕——それは土地とおなじく神が人間に与えたもうたものである——の産物である。そして私は、神が自ら与えた贈り物の一つの利用、他の贈り物の誤用〔搾取と破壊〕の上に成り立たせるほど軽率である〔無教養である〕とは思えないのである。

資本主義の擁護者たちは、億万長者の富は彼の手腕や企てにたいする当然の報酬であると主張する。しかし、この主張は事実によって裏付けられはしない。封建君主の権力が彼自身の努力や企て、あるいは知力にほとんど依存するものではなかったように、億万長者自身の富も、彼の企てや手腕などに依存するものではないのである。両者は、ともに、他の人々の能力や企てを利用し搾取しているのである。たとえ例外的に賢明で、勤勉な億万長者がいたとしても、彼の知恵、企て、勤勉さと社会の他の人々とのそれとの違いは、両者の「報酬」の違いにとうてい比例しえないのである。どんなに勤勉で賢明な人であろうと、一人の人間が千人もの仲間があつまってはじめて獲得することのできる巨額な「報酬」を手にすることができるような社会は、どこかまちがっているにちがいないのである。

権力や名声を手に入れようとして、貪欲になることは、社会主義的〔な考え方〕ではない。利益追求の社会において、富はそれを所有する人々を墮落させる傾向をもつ。富は、それを所有する人々に、自分の仲間たちよりもっと快適な生活をし、より良い服を着、そしてあらゆる面で彼らをしのごうとする欲望を生じさせがちである。富を所有する人々は、隣人よりもせいいっぱい恵まれた地位まで這上らなければならないと思いはじめる。富を所有する人たちにとって、自分たちの快適な生活と、社会の他の人々の、それと対照的に不快な生活との間にある明白な相違が、彼らにとって自分たちの富を享受することそのものになるのである。そして、このことが、際限のない私的な利害競争をひきおこし——そしてそれは反社会的なものとなるのである。

私的な富の蓄積からくる反社会的な結果は別として、それを蓄積しようとする願望は、まさにその社会体制にたいする「不信任」投票であると解釈されなければならない。「私的な富の蓄積をする人はつねに資本主義的な末路におちこむ。けれどもそれだけではない。富をたくわえようとする欲求をもつ人は「ウジャマー」をうたがっているといわれてもしかたがない。」なぜなら、社会〔村〕がその各成員を保護するように組織され、各人が喜んで仕事をするような場合には、このような社会に生きる人は、仮に今日富を貯えていなくても、明日自分の身になにが起こるかかわからないなどと心配することはないだろう



からである。社会それ自体が、そういう人の、あるいは彼の未亡人や孤児の世話をするべきなのである。このことこそまさに、伝統的なアフリカ社会「の慣習にしたがっていた村々」がなしとげたことなのである。「金持ち」も、「貧乏人」も、ともにアフリカ社会においては完全に安心できる生活を送っていた。自然の大災害は飢きんをもたらしたはしたが、それはすべての人々——「貧乏人」であれ「金持ち」であれ——に、等しく飢きんをもたらしたのである。私的な富をもたなかったからといって、食料に飢えたり人間の尊厳を喪失したりする者は誰もいなかった。というのも、各人は自分がその一員であるところの共同体によって所有されている富に依存することができたからである。それは社会主義「(Ubuntu (大家族の精神))」であった。それが、われわれのいう社会主義なのである。貪欲な社会主義「ウジャマー」なるものはありえない。というのは、それもまた言葉の矛盾になるからである。社会主義は分配を本質とする。「ウジャマー」とは、共同作業によって獲得したものを平等に分けあい共有することである。」それが関心をはらうのは、種をまいた人々が、自分でまいた種にみあった公平な分け前をうるようにとりはからうことである。

富の生産は、それが原始的な方法によるものであれ、あるいは近代的な方法によるものであれ、いずれにせよ次の三つのものを必要とする。第一は土地である。神は私達に土地を与えたもうた。その土地から、われわれは原料を手に入れ、それをわ

れわれの必要にかなうように作り直すのである。第二は道具である。われわれはごく身近な体験によって、道具がいかに役に立つものであるかを知った。だからわれわれは、富——われわれが必要とする財貨——を生産するために、鋤、斧、あるいは近代的な工場やトラクターを大いに利用するのである。そして第三は人間の努力——つまり労働である。われわれは、カール・マルクスやアダム・スミスを読まなくても、土地や鋤が実際に富を生産するのではないということを知っている。また、われわれは経済学の学位を取得しなくても、労働者や地主が土地を産み出すのではないということを知っている。土地こそ人間への神の贈り物である——それはいつも変わることなく存在している。しかしまた、われわれは、これまた経済学の学位を取得していなくても、斧や鋤が労働者によって生産されたものであることを十分に承知している。われわれのより洗練された知識の持ち主である友人のなかには、こん棒、それも手製のものであるが、そのこん棒で殺したばかりのインパラ(カモシカよりひとまわり小さく、すばらしい跳躍力をもつ)の皮をより容易に剥がすために、石斧というものが古代の紳士である「原始人」によってつくり出されたのだという、それだけのことを知るために、実に、もっとも厳格な学問的訓練をうけなければならぬのだが。

伝統的なアフリカ社会においては、すべての人が働き手であった。その社会にとっては、それよりほかに生きるすべがな

ったのである。なんの仕事もするではなく、愉快に過ごし、そしてまた、他の誰しもが彼のために働いてくれるかのように見えた長老でさえ、若い頃は一所懸命に働いたのである。彼が現に手にしているかのように見えた富も、私人としての彼のものではなく、実はその富を生産した集団の長老としての「彼のもの」にすぎなかったのである。「彼個人のものとして数えられることはなかった」彼はその管理人だったのである。富それ自体は、彼に権力も名声も与えはしなかった。若者が彼にはらった敬意は、彼が彼らよりも年をとっており、より長きにわたって彼の共同社会に尽してきたがゆえに彼のものだったのである。そして「貧しい」長老も、「金持ち」の長老とまったく変わる。このない尊敬をわれわれの社会において享受したのである。

私は、伝統的なアフリカ社会においては、すべての人々が働き手であったと言ったが、その場合に私は「働き手」という言葉をただ単に「雇主」に対置するものとしてだけではなく、「他の人々を雇用する「金持ち」が存在しなかったという意味ではない。」「のらくら者」や「なまけ者」に対置するものとして用いているわけである。われわれの社会における最大の社会主義的成果の一つは、社会がその成員に与えた安心感と、人々すべてが頼ることのできる万人のための歓待であった。「各人が守られ、歓待されていたことである。」しかし、今日では、この偉大なる社会主義的な達成の基礎が以上のような点にあったということがあまりにもしばしば忘れ去られてしまってい

る。すなわち、社会のすべての成員——子供たちと病弱な人々だけは除いて——が社会の富を生産するために努力を公平に負担し合うということが当然のこととされていた、という点である。資本家あるいは地主収奪者なるものは伝統的なアフリカ社会には存在しなかったばかりでなく、また社会の歓待は、それは自分の「権利」だとばかりに受け入れるけれども、その見返りに何も与えないような現代の寄生虫的存在——のらくら者あるいはなまけ者——ともいべき他の形態もまた存在しなかったのである。資本主義的搾取はありえなかった。のらくら遊んで暮らすなどということは、想像もできないほど恥ずかしいことだったのである。

われわれの中で、アフリカの生活用式について語り、きわめて当然のことであるが、その生活様式のなかでも重要な意味をもつ歓待の伝統を維持していることを自慢する人たちが、つぎのようなスワヒリ語のことわざを思い起こすのも、もったもなことである。すなわち、'Mgeni siku mbili; siku ya tatu mpe jembe' ——英語でいいかえるならば、「あなたのもとへ来た客は、二日間はお客様としてもてなさない。三日目になったら、その人に鉄を与えなさい！」実際には、客は主人が彼に鉄を与えなければならなくなる前に、みずから鉄を求めたようである——なぜなら、客は自分に何が期待されているのか、そしてまたこれ以上なまけていたら恥ずかしくていたたまれなくなるだろうということを知っていたからである。このよう

に、労働は、われわれがまさに正当に誇りとしてこの社会主義的な達成の本質的な部分であるとともに、実にその基礎であり、それを正当化する根拠となるものである。「そういう訳で、仕事をする事は生活の一部であると同時に、ウジャマーの成功の基礎である。そのことを我々は自慢しているのである。」

労働を欠いた社会主義などというものは存在しない。社会の各成員に労働の手段を与えそねた社会、あるいは労働の手段を各人に与えたとしても、彼らが自分たちの汗と労苦からえた生産物の正当な分け前を受けとることができないような社会は、改革する必要がある。同様に、働くことができる——しかも、社会から労働の手段が供給されている——個人が働かないというのも、これまたまちがっている。そういう人間は、社会に対して何らの貢献もしていないのであるから、社会から何かを期待する権利など有しないのである。「なぜならば、彼自身が物事の道理に従っていないのであるから。」

「労働者」という語を、「雇主」に対置される「使用人」という特殊な意味において用いるという他の用法は、植民地主義の到来とともにアフリカにもち込まれた資本主義的精神態度を反映するものであり、それはわれわれ自身の考え方とはまったく異質なものである。かつてアフリカ人には、自分の仲間のだれかを支配するために私的な富を所有したがる者などいなかった。アフリカ人は、自分の利益のために自分の仕事を代わりにやる労働者や「職工」を保有したことなどなかったのである。

しかしその後、外国人の資本家たちがやって来た。彼等は裕福であった。彼等は強大な力をもっていた。そして、アフリカ人もまた自然に、自分たちも裕福になりたいと望みはじめたのである。われわれが裕福になりたいと望むことは、べつに間違ったことではない。また、富がもたらす力をわれわれが獲得しようとするのも悪いことではない。しかし、もしわれわれが他のだれかを支配できるからといって富と力を欲するのであれば、それはこの上もなく明らかに間違っている。不幸にして、われわれのなかには、すでに上述の目的のために富を欲しがるようになってしまう者たちがいる——そして彼らは、資本家達が富を獲得するのに用いる手段を利用してはいるのである。すなわち、われわれの中には自分自身の私的な権力や名声を築き上げるために、自分たちの仲間を利用したり、搾取したがる者がいるのである。これはまったくわれわれの考え方とはことなるものであり、われわれがここに築き上げようとしている社会主義社会と相容れるものではない。

したがって、われわれにとっての第一歩は、われわれ自身を再教育することでなければならぬ。それはすなわち、かつてのわれわれの精神態度を取りもどすことである。われわれの伝統的なアフリカ社会「村々」においては、われわれは共同体のなかの個人であった。「共同体生活をしては、われわれは共同体の全体を大切にしたり、共同体もまたわれわれを大切にしたり。」「われわれは村の人々を世話し、彼らもわれわれを世話した。」

われわれは自分たちの仲間を搾取する必要もなかったし、また搾取したいとも思わなかったのである。

そして、植民地主義がアフリカにもたらした資本主義的な精神態度を取りのぞく場合には、われわれは、それにもなう資本主義的な方式も、同時に退けなければならぬ。これらのうちの一つは、土地の私的所有である。アフリカに住むわれわれにとって、土地はつねに共同体に属するものとみなされてきた。「人々の財産と考えられていた。」われわれの社会に住む各人は、土地を使用する権利を有していた。なぜなら、そうしたければ各人は生計を立てることができなかったからであり、そしてまた生計を維持するためのなんらかの手段にたいするこうした権利がなければ、生存する権利ももたないからである。しかし、アフリカの人の土地にたいする権利とは、単にそれを使用するためのものにすぎなかったのであり、土地にたいするそれ以外の権利はなかったし、そういう権利を要求しようとさえしなかったのである。「それ以上の権利を主張することが人々の脳裏に入り込むこともなかった。」

外国人はまったく異なった概念——売買できる商品としての土地の概念——をもちこんだ。この制度によれば、人は、自分でその土地を活用する意志があると否とにかかわらず、一区画の土地を彼自身の私有財産として主張することができ、それは、やろうと思えば数平方マイルの土地を手に入れて、「自分のものだ」と宣言し、そしてそのまま月へむかって出発するこ

ともできるのである。私が「私の」土地から生活費を得るためにしなければならぬことといえば、その土地を使用したがつている人々に地代を課すことだけである。もしこの土地が都市地域にあるならば、私とその土地を開発する必要はまったくない。つまり、私は「私の」土地をとり囲んでいる周辺の土地全体を開発しようとしている愚か者にその土地を任せることができるのである。ほうっておけば、自動的に、私の土地の市場価格は上昇するにきまっている。そこで私は月から降りて来て、「私の」土地の破格な価値——私が月で楽しんでる間に私のために彼ら自身がみだした価値——にみあう法外な代価を支払うように、愚か者たちに要求することができるのである。こうした制度はわれわれにとっては異質なものであるばかりではなく、まったく間違っている。土地の私的な所有を認めている社会において、地主というものは、私が話したのらくら者と同じ階級、すなわち寄生虫的な階級に属することができるのである。また通常のばあい、実際にそうなのである。

ここタンガニーカにおいて、われわれは寄生虫どもの成長〔出現〕を許すわけにはいかない。TANU政府は、土地保有に關する伝統的なアフリカの慣習にたち帰らねばならない。すなわち、社会の成員は、それを、自分で使用するという、ことを条件に、一区画の土地にたいする権利を有することになる。無条件な、あるいは「自由保有」の土地所有（それは投機や寄生につながる）は、廃止されなければならない（このような制度は、土地が布



のように売られることを意味し、搾取という現象をもたらす。――スワヒリ語では以上の文章がつけ加えられている」前述のように、われわれはかつて自分たちのものであった精神態度――われわれの伝統的なアフリカ社会主義――を取りもどし、それを今日われわれが築きつつある新しい社会に適用しなければならぬのである。TANUは、あらゆる分野において社会主義をその政策の基礎にすることを誓約した。タンガニーカの人々は、TANU政府が自分たちを指導すべきことを選択することによって、われわれにその政策を遂行する権限を委任した。それゆえに政府は、社会主義的な諸原理にかなう法律だけを提案するものであると信頼されているとができるのである。

しかし、はじめにも述べたように、真の社会主義は精神のありようである。したがって、個人的には、私的な利益（あるいは権力ある地位の濫用）の誘惑に負けたり、あるいは、われわれ自身の特定の集団の利益を優先させて、共同社会全体にとっての利益を第二義的な重要性しかもたないものであるとみなそうとする誘惑に駆られることによって、「人々の利益を少数者のための利益と対比することは意味がないとみなそうとする誘惑に駆られることによって、」この社会主義的な精神態度が失われるようなことがないように信念を固めることは、タンガニーカの人々――農民、賃銀労働者、学生、指導的立場にある人々、そしてわれわれすべて――にとつての責務なのである。われわれのかつての社会において、長老が彼の年令と共同体

への奉仕のゆえに尊敬されたのとまったく同じように、われわれの現代社会においても、年令と奉仕にたいする尊敬は維持されるであろう。そして同様に、「金持ち」の長老たちが所有しているかのように見えた富が、実は人々に代わって彼によって保管されていたにすぎなかったのと同じように、今日、特定の指導的地位がその地位を占めている個人にもたらすかのように見える破格な富も、それが彼らの任務を遂行する上で欠くことのできない助けになるといふ、そのかぎりにおいてのみ、彼らのものでありうるにすぎない。それは、彼らが奉仕する人々の利益のために、彼らに委託された「手段」である。それは私的な意味で「彼らのもの」であるわけではない。彼らは、その富の一部たりといえども、自分たち自身の利益のために蓄財する手段としても、また自分たちがもはやその地位にとどまることができなくなった時のための「保険」としても、利用してはならないのである。そのようなことは、彼らに富を委ねた人々を裏切ることになるであろう。もし彼らが可能な期間に共同体に奉仕するならば、共同体は彼らのもはややそうできなくなった時には、彼らの世話をしなければならぬ。

部族社会においては、ある部族内における個人や家族は、その部族全体が富んでいるか貧しいかによって、「金持ち」であったり「貧乏人」であったりした。部族が繁栄しているときには、その部族の成員全体がその繁栄の配分にあずかることができるのである。タンガニーカは、今日、貧しい国である。われ



われの国民大衆の生活水準は恥ずかしいほど低い。しかし、男女を問わず、すべての国民が社会全体の利益のために、彼の、また彼女の能力の限界に挑戦して働くならば、タンガニカは富み栄えることであろう。そして、その繁栄は国民すべてによって分かちあわれるであろう。

いや、「しかし、その成果は、すべての人たちに」必ず分かちあわれなければならないのである。真の社会主義者は、自分の仲間を搾取してはならない。それゆえに、もしわれわれの社会のなかのある集団の人々が、たまたま自分たちが他の集団よりも国民所得に貢献しているのだから、自分たちのために、自分たちの産業が生み出した利益のなから、彼らが実際に必要とする以上の利益を獲得しなければならぬ、などと主張するならば、そしてまたそうすることが、国民所得にたいする彼らの集団の貢献度を減じ、かくして自分たちの社会全体が利益をうけることのできる程度を低下させるということを意味するであろうにもかかわらず、そう主張するならば、その集団は仲間の人間を搾取している（あるいは搾取しようとしている）ことになる。それは、資本主義的な精神態度のあらわれにほかならない。

特定の産業がうみ出す生産物の「市場価値」によって、「耕やした生産物や作りだした製作物の価値によって、」きまっただけの他の集団以上に国民所得「国の経済」に貢献する一定の集団が存在するものである。しかし、それ以外の集団も、たまたまそ

のような高い人為的な価格をつけることができなかつただけであり、実際にはそれに等しいか、あるいはそれより大きな本質的価値をもつ財やサービスを生産しているであろう。たとえば、小自作農によって生産された食料は、ムワドウィ (Mwadi) (北西部シヤンガ市近郊のダイヤモンド鉱山) で採掘されたダイヤモンドよりも、より大きな社会的意味をもつ。しかし、ムワドウィの鉱山労働者は、きわめて正当にも、自分たちの労働は農民たちのそれよりも、社会にとってより大きな財政的利潤をもたらしているのだということを主張しうる。しかしながら、もし彼らが、それゆえにその特別利潤の大部分は自分たちと与えられるべきであり、農民たちを援助するために費されるべき配分などはない、などと主張するようになるならば、彼らもはや潜在的な資本家であろう！

このことがまさに、精神態度がいかなるものであるかという問題なのである。労働組合の目的の一つは、労働者たちに自らの労働が生み出した利益にたいする公正な配分を確保することである。しかし、「公正」な配分とは社会全体との関連において公正でなければならぬ。もし、それが、社会のある他の部分に不利益を及ぼすことなしに国が与えることの出来る範囲を超えているならば、それは公正な配分とはいえない。労働組合の指導者たちや彼らの指導下にある人々は、彼らが真の社会主義者であるかぎり、全体としての社会の必要によって課せられた限界内に自分たちの要求を抑えるように、政府によって強制

される必要はない。ただ、もし彼らの間に潜在的な資本家がいる場合には、社会主義政府はそれに干渉し、彼らの資本主義的  
理念を實踐にうつさせないようにしなければならぬ！

集団についてと同じことが、個人についてもいえる。特定の  
熟練や特定の資格というものがあるが、これらは当然のことな  
がら、その持ち主に他の人々よりも高い等級給料を保証する。  
しかし、このような場合においても、真の社会主義者であ  
れば、自分の属する社会全体の豊かさや貧しさに比例して、公正  
であると思われる報酬のみを、自己の熟練労働にたいして要求  
する。資本家志望でもないかぎり、彼は、はるかに豊かな社会  
で彼と同等の人間に支払われているのと同額の俸給を要求する  
ことによって社会をゆるろうなどとはしないのである。

ヨーロッパの社会主義〔ウヅジャマー〕は、農業革命とそれに  
つづく産業革命から生まれた。前者は「地主」階級と「土地を  
持たない」階級とを社会のなかに作り出し、後者は近代的資  
本家と工業プロレタリアートを産み出した。

これらの二つの革命は、社会の内部に闘争〔国に敵愾心〕の  
種をまき、そしてその闘争の中からヨーロッパ社会主義が生ま  
れたのみならず、その唱導者たちはその闘争自体を正当化して  
哲学にまでたかめたのである。内乱はもはや悪であるとも、ま  
た不幸なものであるともみなされず、善であり必要なものであ  
るとみなされた。祈りというものがキリスト教やイスラム教に  
とってそうであるように、内乱（これを彼らは「階級闘争」と

よぶ）は、社会主義に関するヨーロッパ的見解にとってその目  
的から切り離すことのできない手段なのである。両者ともに、  
生活様式全体の基礎となるのである。ヨーロッパの社会主義者  
は、その父——資本主義！——を考へることなしに、自分たち  
の社会主義について考へることはできない。

私は部族社会主義の中で育つたために、この矛盾をまったく  
耐えがたく覚えると言わざるをえない。それは、資本主義が要  
求しなければ、それに値するものでもない哲学的な地位を資  
本主義に与えるものである。なぜなら、それは事実上、「資本  
主義が存在しなければ、そして資本主義が社会の内部に生み出  
す闘争がなければ、社会主義などありえない。」と言っている  
ことになるからである。くり返し言おう。教条主義的なヨーロ  
ッパ社会主義者たちによる、こうした資本主義の賞賛に、私は  
がまんできないのである。

他方において、アフリカ社会主義は農業革命や産業革命の  
「恩恵」にあずかることはなかった。社会において相争う「階  
級」の存在から、アフリカ社会主義は出発したわけではな  
い。実際、アフリカの土着の言葉のなかに「階級」という言葉  
に相当するものが存在するかどうか疑わしいと私は思う。とい  
うのも、言葉とはそれを語る人の思想を表現するものであり、そ  
して、アフリカの社会には、「階級」や「カースト」（スワヒリ語  
版には「カースト」はない）という思想は存在しなかったからで  
ある。

アフリカ社会主義の基礎であり、そしてその目的でもあるのは、拡大した家族である。真のアフリカ社会主義者は、その社会の一方の階級を自分の同胞であり、他のものを宿敵であるとは考えない。彼は「非同胞」を絶滅するため「同胞」と同盟を結んだりはしない。むしろ、彼はすべての人間を自分の同胞——どこまでも拡大する自分の家族の構成員——とみなすのである。だからこそ、TANU綱領の第一条は、「すべての人類は、私の兄弟であり、アフリカは一つである」(‘Binadamu wote ni ndugu zangu, na Afrika ni moja’—原文)なのである。もしこれが最初から英語で書かれていたとすれば、つぎのようになったであろう。「私は人間の同胞愛とアフリカの団結を信ずる」と。

‘Ujamaa’ 言いかえるならば、「同胞愛」こそわれわれの社会主義を表現するものである。それは、人間による人間の搾取の上に幸福な社会を築き上げようとする資本主義に対立するものであり、同様にまた、それは人間と人間との不可避的な闘争という哲学の上に幸福な社会をつくろうとする、教条主義的な社会主義とも対立するものである。

アフリカに生きているわれわれにとって、あらためて社会主義に「転向」する必要がないように、また、民主主義を「教わる」必要もない。両者はともに、われわれ自身の過去に——われわれを生んだ伝統的な社会に根づいているのである。現代のアフリカ社会主義は、伝統的な遺産のなから、基本的な家

族単位の拡張として「社会」というものを認識することができ。しかし、それはもはや社会的家族の理念を、部族や、また国家の範囲内にすら、限定することはできないのである。なぜなら、真の社会主義者であるならば、地図の上に引かれた一本の境界線を見て、「その線のこちら側に住んでいる人々は私の同胞であるけれども、その線の向こう側に住んでいる人たちは、私にむかって何かを要求することなどできない」などと言うことはできないはずだからである。この大陸に生きていすべての人々が彼の兄弟なのである。

われわれが団結することの必要を学んだのは、植民地主義の軛を断ち切るための闘争においてであった。われわれは、部族社会の時代において拡大した家族に帰属することによってもたらされた保証をすべての個人に与えていた、それと同じ社会主義的な精神のありようが、国家のより広汎な社会の内部でも維持されなければならないということを確認するようになった。しかし、われわれはここで立ちどまるべきではない。われわれのすべてが属している家族についてのわれわれの認識は、なおいっそう拡大され——部族をこえ、地域社会をこえ、国家をこえ、あるいはさらに大陸さえこえて——人類社会全体を包みこまなければならない。これこそが、真の社会主義にとって唯一の論理的帰結なのである。

(佐藤正市)

## 2 アルーシャ宣言

一九六七年二月五日

宣言は討議に付されたのちに、スワヒリ語で公表された。改訂されたこの英訳は、最初に刊行された翻訳文のなかにあったあいまいな個所を明確にしたものである。

アルーシャ宣言および社会主義と自助に関するTANUの政策

### 第一章

#### TANUの信条

TANUの政策は、社会主義国家を建設することである。社会主義の諸原則はTANU憲章に定められており、それは以下のとおりである。

TANUは以下のことを確信する。

- (a) 全人類は平等である。
- (b) すべての個人は、人格の尊厳を認められ敬意をはらわれる権利を有する。
- (c) すべての市民は、国家にとって欠くことのできない部分であり、そして地方、地域および国家の各段階で、政治に等しく参加する権利を有する。

(d) すべての市民は、法の許す範囲内において、表現、移動、信仰ならびに結社の自由の権利を有する。

(e) すべての個人は、社会から、生命、および法によって所有が認められている財産の保護をうける権利を有する。

(f) すべての個人は、みずからの労働にたいする正当な報酬を受けとる権利を有する。

(g) すべての市民は、子孫のために国土のあらゆる天然資源を共同保管する。

(h) 経済的な公正を保証するために、国家は、主要な生産手段を有効に管理しなければならない。さらに、

(i) すべての市民の福祉を保証するために、また個人による個人の、あるいは集団による集団の搾取を阻止するために、また階級のない社会の存在と矛盾するような大きな富の蓄積を防ぐために、国民の経済生活に積極的に介入することは、国家の責任である。

よって、ここに、TANUの基本的目的と目標を以下のとおり定める。

(a) 国家の独立と人民の自由を強固にし、かつ堅持すること。

(b) 世界人権宣言に従って、個人に固有の尊厳を擁護すること。

(c) この国が、人民の民主的な社会主義政府によって統治されることを保証すること。

(d) 全アフリカの解放のために闘っている、アフリカのあらゆる

る政治的勢力と協力すること。

(e) 貧困、無知、病いを絶滅するために、政府が、この国のあらゆる資源を活用するように促進すること。

(f) 政府が、協同組織の形成と維持を、積極的に支援するように促進すること。

(g) 政府が可能なかぎり、この国の経済発展に、みずから直接に参加するように促進すること。

(h) 政府が、人種、宗教、身分にかかわらず、すべての男女に平等の機会を与えるように促進すること。

(i) 政府は、あらゆる型の搾取、脅迫、差別、賄賂を根絶するように促進すること。

(j) 政府が、基本的な生産手段にたいして、有効な管理を行ない、国家の資源を集团的所有にみちびく政策を追求するように促進すること。

(k) 政府が、アフリカの統一を実現するために、他のアフリカ諸国と協力するように促進すること。

(l) 政府が、国際連合機関をつうじて、世界の平和と安全にむかって、たえまなく活動するように促進すること。

## 第二章

### 社会主義の政策

(a) 搾取が存在しないこと

真の社会主義国家とは、国民のすべてが労働者であり、資本主義も封建主義も存在しない国家である。その国家には、自分たちの生活のために働く人々からなる下層階級と、他人の労働に寄食する人々からなる上層階級、という二つの階級は存在しない。真に社会主義的な国家においては、何人も他者を搾取せず、健康で働くことのできるすべての者は労働し、すべての労働者は、自分がやりとげた労働にみあう正当な報酬を獲得し、労働の種類がことなるからといって収入がはなはだしく差別されるようなことがあってはならないのである。

社会主義国家においては、他の人々の労働に依存して生活する人々、つまり、仲間に依存する権利をもっているのは、幼い子供、年老いて自活できない人、身体の不自由な人、および一時的に国家が、生活のために働く機会を与えることができない人々だけである。

タンザニアは、農民と労働者の国である。だが、まだ社会主義国家ではない。それは、いぜんとして、封建主義と資本主義の要素を含んでいる。われわれの社会にみられる、これらの封建的および資本主義的な性格は、さらに拡大し、強固なものになる可能性があるのである。

(b) 生産と交換の主要な手段は、農民と労働者の管理下におかれる



社会主義を建設し、維持するためには、国家におけるすべての主要な生産と交換の手段は、政府機構や協同組織をつうじて、農民によって管理され、所有される。さらに、指導的な政党が農民と労働者の党であることも不可欠である。

生産と交換の主要手段とは、土地、森林、鉱物資源、水、石油と電気、情報伝達機関、交通、銀行、保険、輸出入貿易、卸売業、鉄鋼、機械、武器、自動車、セメント、肥料、織物産業である。さらに、人民の大半の生活が依存しているか、もしくは他産業にとって不可欠な生産手段を供給している他の大工場。とりわけ重要産業に不可欠な原料を供給する大農園である。

以上に列挙した生産と交換手段のいくつかは、すでに、タンザニア人民の政府の所有あるいは管理のもとにある。

### (c) 民主主義が存在すること

国家は、生産と交換の手段のすべてであれ、あるいは大部分であれ、それが政府によって管理され所有されているというだけでは、社会主義的であるとはいえない。社会主義国家であるためには、その政府が農民と労働者自身によって選ばれ指導されていることが不可欠だとするからである。たとえば、ローデシアや南アフリカの（白人）少数派政府がそれらの国の経済全体を管理し、所有しているとしても、その結果は抑圧を強化するだけであって、それによって、社会主義はもたらさない。

う。同時に社会に民主主義なくして、真の社会主義はありえない。

### (d) 社会主義は一つの信念である

社会主義は、一つの生活態度であり、また、社会主義社会は自然に出来るものではない。社会主義の原則をかたく信じ、かつそれを実践する人々によってのみ建設しうるものである。TANUの成員は、社会主義者であり、彼の同志の社会主義者、すなわちこの政治的、経済的体制の信条者たちはすべて、アフリカや世界の他の地域で、農民と労働者の権利のために闘っている人々である。TANUの成員、とくにTANUの指導者にとって第一の義務は、これらの社会主義的原則を受け入れ、それらに従って、日々の生活を送ることである。とりわけ、真のTANU指導者ならば、他人の汗の結晶に寄食したり、また封建的あるいは資本主義的な行為をおこなってはならない。

社会主義の目標の成就是、その指導者に大きく依存している。なぜならば、社会主義は特定の生活制度を信奉することであり、そして指導者自身にその確信がなければ、彼らが社会主義を発展させていくことは困難だからである。

## 第三章

### 自力更生の政策

われわれは戦っている

TANUは、わが祖国における貧困と抑圧にたいする戦いのまっただなかにある。「TANUは、私たちの国の弱さをとりぞぎ、強さを与える闘いの中にある。」この闘争は、タンザニアの国民（そしてアフリカ全体の人民）を貧困の状態から繁栄の状態に移行させることを目的としている。

われわれはあまりにも抑圧されあまりにも搾取され、軽視されてきた。このように抑圧され、搾取され、そして軽視されてきた原因は、まさにわれわれの弱さにある。いまや、われわれはわれわれの弱さに終止符をうち、二度とふたたび搾取され、抑圧され、侮辱されることのないようにするための革命を欲している。

貧しい人間の武器は金ではない

しかし、過去において、明らかにわれわれは、闘争のために誤った武器を選んでいった。というのは、われわれが自分たちの武器として金を選んでいったからである。われわれは、経済的に強力な武器—われわれが現実には所有していない武器—を使用することによって、われわれの経済的なぜい弱性を克服しようとしているのである。われわれの思想、言葉、そして行動をみると、あたかも金なくしては、われわれが目的としている革命を達成できないという結論に達しているかのようである。「資金は発展の基礎である。資金なくして、発展はありえない。」

とわれわれは言ってきたかのようにである。

われわれが現在信じこんでいることも、こうしたことにはかならない。TANUの指導者や政府の指導者、そして役人も、すべて資金を極端に重視し、かつそれに依存している。TANU、NUTA (National Union of Tanganika Workers タンガニカ労働者組合)、議会、UWT (Umoja wa Wanawake wa Tanzania タンザニア婦人同盟)、協同組合、TAPA (Tanganika African Parents Association タンガニカ・アフリカ人父母の会)、そしてその他の国民的機関に属する国民の指導者ならびに国民自身は、資金を思い、望み、そして乞い願う。それはあたかも、われわれが声をあわせて「もし、われわれが資金を得れば、われわれは発展するだろう。だが資金なくしては、われわれは発展することはできない。」と叫んでいるかのようにである。

要するに、われわれの開発五カ年計画（一九六四〜六九年の第一次五カ年計画）は、より多くの食糧、より充実した教育、そしてより良い健康状態をめざしている。しかし、われわれが重視してきた武器は資金である。それはあたかも、「今後五カ年の間に、われわれは、より多くの食糧、より充実した教育、そしてより良い健康状態が得られることを望んでいるが、これらを達成するためには、われわれは、二億五〇〇〇万ポンドを要するであろう。」と言っているのと同じである。われわれは、頼るべき最も重要なものは資金であり、われわれの闘いに用いようとしている他のものは、それほど重要でないかのように考え

たり、言ったりしているのである。

国会議員が、彼の選挙区における水不足について語り、この問題をどのように処理するつもりか、と政府に質すとき、かれは政府が、自分の選挙区の水不足を解消する——資金に裏づけられた——計画を立案中であると答えることを期待しているのである。

別の議員が、彼の選挙区における道路、学校、病院の不足にたいして、政府はどう対処しようとしているのかとただすとき、彼もまた、政府が彼の選挙区に道路、学校、病院を建設するための——資金に裏づけられた——特別な計画をもって、と答えることを期待しているのである。

NUTAの役人が、政府に、労働者の低賃金ならびに貧困な住宅事情に対処する計画を質すとき、彼は、政府が最低賃金の増額と、より良い住宅の供給が——資金の裏づけをともな——労働者にもたらされるだろう、と知らせてくれることを期待しているわけである。

TAPAの役人が、政府援助をうけていない多くのTAPAの学校に援助を与えるためにどのような計画を持っているかと政府に質すとき、彼は、政府が翌年には要請された援助を——資金の裏づけをもって——与える用意がある、と表明することを期待している。

協同組合運動の役人が、農民が直面している問題に言及するとき、彼は、政府が——資金の裏づけをもって——農民の問題

を解決しようと言うのを聞いたがっているのだ。要するに、だれもかれもが、わが国が直面しているあらゆる問題にたいする解決策は資金と考えているのである。

毎年、政府の各省は、予算すなわち経常支出および拡大支出をまかなうために、次年度に必要な金額の概算を作成する。歳入の概算を作成するのは、ただ一人の閣僚と彼の省だけである。それは大蔵大臣である。各省は、立派な開発計画を提出する。省がその予算を提出するときには、その省が要求しただけの財源はあるにはあるが、しかし大蔵大臣と大蔵省はうんと言わないだろうということ、その省は知っている。そして、大蔵大臣は、毎年きままって、彼の同僚大臣にたいして財源はない、と伝えなければならぬ。そして毎年、各省は、その概算を削減されたことについて、大蔵省に不平をこぼすのである。

同様に、議員や他の指導者たちが、政府はある開発を遂行すべきであると要求するときには、彼らは、こういった計画に使用するための資金は豊富にあるが、政府が障害になっている、と考えている。しかし、各省、議員および他の指導者たちのこういった確信にもかかわらず、政府が資金をもっていないという歴然たる事実を変えることはできないのである。

政府は資金をもっていない、と言われるとき、このことは何を意味しているのだろうか。それは、タンザニアの国民が十分な資金を持っていないということの意味しているのである。国民は、かれらの持っているごくわずかな富から税金を支払って

いる。そして、政府が経常支出および拡大支出（政府の活動や国の発展）にあてるのは、こういった税金なのである。われわれが政府にたいして、開発計画により多くの資金を費やすように要求するとき、われわれは、より多くの資金を使用せよと政府に求めているのである。そしてもし政府がもうそれ以上の資金を持っていないとすれば、政府がなしうる唯一の方法は、特別税によって歳入を増大することである。

もし、政府にたいしてもっと資金をだせと要求するならば、それは要するに、税金を増やせと政府に要求していることにはかならないのである。増税せずに、より多くの支出を政府に要求することは、政府に神わざを行えと要求しているようなものである。それはちょうど一方で、牛から再びミルクをしぼりとるべきではないと主張しながら、牛により多くのミルクを要求することに等しい。だが、われわれが、政府により多くの支出を求めることは増税を求めると同じであることを認めよう。としないのは、われわれが増税の困難さを十分に承知していることを示しているのである。われわれは、牛がもはやミルクをもっていないし、つまり、国民はこれ以上の税金を支払うことはむずかしいと感じているのを知っている。われわれは、牛自身は自分の子牛に飲ませることができるよう、もっとミルクを欲しがっているのを知っている。また、自分や子牛のためにより快適にくらせるように、売るためのミルクが沢山ほしいということを知っている。しかし、もっとミルクがあればでき

ることを数えあげてみても、牛がこれ以上のミルクをもっていない、という事実は変えられないのである！

#### 外部（外国）からの援助をどう考えるべきか

開発のために、より多くの資金をもちたいのだが、しかし増税の必要性を認めまいとする場合に、われわれが用いる一つの方法は、タンザニアの外部から特別な資金を獲得しようと考えることである。このような外部からの財源は、大きく分けて三つの型に分けられる。

(a) 贈与 これは、外国（外国の）政府が特定の開発計画のために無償で一定の金額をわが政府に贈与することを意味する。ときには、外国のある機関が、わが国の政府またはある機関に、開発計画のための財政援助を与えることもある。

(b) 借款 われわれが外国からの獲得を期待する財政援助の大部分は、贈与や寄附ではなくて、借款の形をとっている。外国の政府や、銀行のような外国の機関が、開発目的のために、わが政府に資金を貸与する。このような借款には、償還条件が付随しており、それが利用できる期限と利子率といった要素が含まれている。

(c) 民間投資 財政援助の第三の型もまた、第一のものよりも重要である。この場合、外国の個人または会社による、わが国への投資という形をとる。このような民間投資家がつねに念頭に置いている重要な条件は、自分の金を投資する企業が利潤を当

然かれらにもたらすこと、そしてわが政府がこうして得た利益を本国に送金することをかれらに許可すべきだ、ということである。かれらもまた、かれらが納得する政策をとり、そしてかれらの経済的利益を保証する国に投資することを選ぶのである。

これら三つのものは、外部からの財源の主要な種類である。そして、タンザニアには、外部から資金を得ることについての議論が山ほどある。われわれの政府やわれわれの指導者たちの諸集団は、外国から財源を得る方法について思いめぐらし、飽くことがない。そして、われわれがこうした資金を獲得したときには、または、たんにその約束を取り交わしたときでさえ、われわれの新聞、ラジオ、そして指導者たちは、救いがやってきた、あるいはやってきつつある、ということをみんなに知らせるために、その事実をいっせいに発表する。われわれは、贈与を受ければ、そのことを発表し、借款を受ければそのことを、新しい工場を得たときにも、そのことを発表する——そしていつも大々的にだ。同じように、贈与、借款あるいは新しい工場についての約束を得るときにも、われわれはその約束を発表する。われわれが、たんに外国の政府または機関との間で、贈与、借款あるいは新しい工場についての討議を始めたにすぎないときでさえ、われわれは発表する——たとえ討議の結果を予測できなくても。いったいなぜ、われわれはこんなことをするのだろうか。それは、われわれが、繁栄をもたらすであろう

討議を始めたことを人々に知ってほしいからなのだ。

#### 開発のために資金に頼らないことにしよう

わが国の貧しさを知りすぎるほど知っていながら、開発の主要な手段として資金に頼るのは、ばかげたことである。われわれが、自分たち自身の財源よりも、外国の財政援助をつうじて貧困から脱出できると考えるのも、同じようにばかげたことである。いや、それはより以上にばかげたことでさえある。それは二つの理由でばかげている。

第一に、われわれは資金を獲得できないであろう。われわれを援助することができ、そして援助したいと思っている国があることは事実である。しかし、開発目標のすべてを達成できるだけの贈与あるいは借款をわれわれに与え、または工場を建設する用意のある国は、世界には存在しない。世界には貧困な国が多い。たとえ豊かな国すべてが、すすんで貧困な国を援助するとしても、その援助はいぜんとして十分なものではないだろう。しかし、いかなる場合にも、豊かな国は、世界の貧困と闘うという責任を引き受けようとはしなかった。その豊かな国の内部にも、いまだに貧困が存在しているのに、金持ちたちは同胞である貧しい市民を助けるために、すすんで政府に金を与えようとはしないのだから。

一般大衆を援助するために富める者から金をひき出すことができるのは、望むと否とにかかわらず、人々が支払わなければ



ならない税金によるのみである。それでも資金は十分でないであろう。われわれがタンザニア市民と、当地に住む外国人に、いかに重く税を課したとしても、その結果得られる歳入は、われわれの望む開発費用を十分にまかなうことはできないであろう。また、貧困な国々を援助するために豊かな国々に課税することのできる世界政府は存在しない。たとえ、このような政府があったとしても、それは世界で必要とされているあらゆることを実行するために十分な歳入を得ることはできない。しかし、現実には世界政府というものは存在しない。豊かな国々が貧困な国々に提供するような資金は、善意からか、あるいは自身の利益のために、自発的に与えられるものである。以上のことすべては、経済開発のために海外から十分な資金を得ることは、タンザニアにとって不可能であるということの意味している。

### 贈与と借款は、われわれの独立を危うくするだろう

第二に、たとえ外国の財源から、われわれの必要にとって十分な資金を得ることができるとしても、これが、われわれが本来に求めているものであろうか。独立とは、自助を意味する。もしある国が、開発のために他の国からの贈与と借款をあてにするならば、ほんとうの独立とはいえない。たとえ、開発のためにわれわれが必要とする資金のすべてをわれわれに与える用意のある国もしくは国々があったとしても、このような援助が

われわれの独立と国家としての存続それ自体にどんな影響を与えるかを自問することなく、それを受け入れることは、われわれにとって間違っている。われわれ自身の努力を増加させたり、あるいは刺激したりする贈与は、有効なものである。しかし、われわれ自身の努力を弱めたりゆがめたりするような贈与は、多くの問題について自問することなしに、受け入れるべきではない。

同じことが借款についてもあてはまる。借款が、「無償の」贈与よりもましなことは、事実である。借款は、われわれの努力を増大させ、また、その努力をより実りあるものにするためのものである。借款の一つの条件は、それをどのように償還するつもりであるか、を示すことである。このことは、借款を有益に使用する意図をもち、したがって償還できるだろうということ、を示さなければならぬことを意味する。

しかし、借款にも限度がある。償還能力について、考えなければならぬ。われわれが他の国々から資金を借りる場合、それを返済するのはタンザニア人である。そして、すでに述べたように、タンザニア人は貧しい。償還が彼らの資力をしのぐほど多額の借款を人々に負担させることは、彼らを援助することではなくて、彼らに苦痛を与えることになる。償還を求められる借款が、多数の人々の利益にはならず、ほんの少数の人々のみの利益となるようなことは、さらに悪い状態である。

外国投資家の企業についてはどうであろうか。われわれが、

こうした企業を、必要としていることは事実である。われわれは、この国における外国投資を保護する議院立法さえ通過せしめた。われわれがねらっているのは、タンザニアでは投資が安全かつ有利であり、その利益が簡単に国外に持ち出せるがゆえに、タンザニアは投資に有利な国であると、外国投資家に思わせることである。われわれは、この方法によって資金〔開発資金〕を得ることを期待している。しかし、われわれは十分に得ることはできない。そして、たとえばわれわれが外国投資家や外国の会社が、われわれの必要とする経済発展のためのすべての事業ならびに計画を引き受けると確信できたにしても、それはわれわれが本当に期待しているものであるのだろうか。

たとえば、アメリカやヨーロッパから投資家がやってきて、われわれがこの国で必要とするすべての産業と経済開発のすべての事業とを開始するように引きつけることができたとしても、われわれは自問することなしに、そんなことができるだろうか。われわれは、利益を自分の国に持ち去る外国人の手に、わが国の経済を委ねることについてどうして同意しなければならぬのであろうか。あるいは、かれらがその利益を持ち去ることを主張しないで、タンザニアに再投資することを決定したと仮定しよう。われわれは、わが国がどのような不利益をこうむるだろうか、と自問することなく、このような状態を本当に認めることができるだろうか。その建設がわれわれの目標であるとのべてきた社会主義が、このようなことをいったい認める

であろうか。

われわれは、自分たちの独立を危うくすることなく、外国や外国の企業からの贈与、借款および投資に、どのようにして依存できるだろうか。イギリスには、「金を出す者は口も出せる」  
「歌い手に金をはらった人が歌を選ばず」という諺がある。われわれも、自分たちが思いどおりに行動する自由の大部分を、外国の政府や企業に与えることなくして、われわれの開発の主要部分を、それらの政府や企業に依存することが、どうしてできるだろうか。実際は、そのようなことはできないのだ。

もう一度くりかえそう。われわれは、開発の主要な手段として資金——われわれが持っていないもの——を選ぶという誤りを犯した。われわれは、他の国々から資金を獲得しようと考えたという誤りを犯しつつある。その理由の第一は、実際上、われわれは経済開発のために十分な資金を獲得することができないということである。そして、理由の第二は、われわれが必要とするものすべてを獲得できたとしても、他者に依存するということ、われわれの独立と、われわれ自身の政策を選択する能力を危うくするからである。

われわれは工業をあまりにも重視してきた

資金を重視したので、われわれはもう一つ大きな誤りを犯してきた。われわれは、工業をあまりにも重視しすぎてきた。ちやうどわれわれが、「資金なくして発展は不可能である。」と言

ったように、「工業は発展の基礎である。工業なくして発展はない。」とも、言っているように思われる。このことは真実である。われわれが多額の金を持ったときに、はじめて、われわれは開発された国であるということが出来るだろう。また、「われわれが開発計画に着手したときには、われわれは十分な金を持っていなかった。そしてそのような状態であったがゆえに、われわれの望む速さで開発することは困難であった。今日、われわれは開発されており、資金を十分に持っている。」と言うことが出来るだろう。すなわち、われわれの資金は開発によってもたらされた。同じように、わが国が工業化された日に、はじめてわれわれは開発されているということが出来るだろう。発展は、われわれに工業をもたらしることが出来るだろう。われわれが犯している誤ちは、発展は工業をもって始まると考えていることである。それは、わが国が国内に多くの近代的な工業を建設する手段を欠いているがゆえに、誤りなのである。われわれは、必要な財源もなければ、技術的な知識もっていない。われわれは、工業を起こすために、他の国々から資金と技術者を借りよう、と言ってすますことはできない。これにたいする解答は、われわれが必要とする工業のすべてを起こすために、十分な資金を獲得し、十分な技術者を借りることは不可能である、という、すでに述べたことと同じである。そして、たとえわれわれが必要な援助を得ることができるとしても、それに依存することは、われわれの社会主義政策をさまたげる

ことになりうる。わが国に資本家たちを招いて、工業を確立させるという政策は、われわれが必要とするすべての工業をもたらしことに成功するかもしれない。しかし、まずはじめに資本主義を確立することなくしては、われわれは社会主義を建設できない、とでも信じないかぎり、それはまた同時に、かならずや社会主義の確立を妨げることになるであろう。

#### 農民に注目しよう

資金と工業の重視は、われわれの関心を都市の発展に集中させてきた。われわれは、あらゆる人々のためになるような発展を各村々にもたらしだけの十分な資金をもっていないことを認識している。われわれはまた、各村ごとに一つの工業を設立し、この手段をつうじて、人々の実質所得の増大を図ることができないことも知っている。これらの理由から、われわれは都市地域に資金の多くを費やし、こうして、われわれの工業は都市に建設されるのである。

しかし、われわれが都市に費やした資金の大部分は、借款によるものである。それが、学校、病院、住宅あるいは工場などのうちのどれを建設するために使われるとしても、それは返済しなければならぬものである。しかし、それが都市と工業の発展から得られる金だけでは返済できないことは明白である。借款を返済するためには、われわれは、輸出品の販売によって得られる外貨を使用しなければならぬ。しかし、われわれは

現在、われわれの工業製品を外国市場に販売してはいない。そして実際に、われわれの工業が輸出品を生産するまでには、長い時間がかかりそうである。われわれの新しい工業の主目的は、「輸入代替」——すなわち、いままでも外国から輸入しなければならなかった製品を生産することである。

したがって、われわれが都市地域の開発に充当された借款の返済に使用する外貨は、都市や工業からは得られないということとは、明らかである。では、われわれはそれをどこで手に入れるのだろうか。われわれは、それを村や農業から得ることになるだろう。このことは何を意味しているだろうか。それは、借金によってもたらされる発展から直接利益を受ける人々が、借款を償還する人々ではない、ということを意味するのである。借款の大部分は、都市地域において、都市地域のために使用されるが、しかし償還の大部分は、農民の努力によってなされるであろう。

この事実は、つねに心にとめておくべきである。なぜなら、搾取にはさまざまな形態があるからである。われわれは、都市に住む人々が、農村地域に住む人々の搾取者になりうる、ということをおぼえてはならない。われわれの大きな病院のすべてが都市にあり、それらはタンザニアのごく一部の人々のみ奉仕しているのである。しかし、もしわれわれが、それらをタンザニア外部からの借款によって建設したならば、返済のための外貨を提供するのは、まさに海外へ販売される農民の生産物なの

である。かくして、病院の利益を受けない人々が、病院のための支払いの主要な義務を負うことになるのである。舗装道路もまた、ほとんどが都市に集中しており、それは自動車所有者には特別な価値をもっている。しかし、もしわれわれが借款によってこれらの道路を建設したとするならば、それを支払うための商品を生産するのは、ここでもまた農民である。その上、自動車を購入する外国為替もまた、農民の生産物を販売することによって得られるのである。さらに、電燈、水道管、ホテル、そのほか近代的発展の他の産物もまた、その多くが都市においてみられる。その多くは借款によって建設され、そしてそれらは農民の生産物の販売によって獲得された外貨で支払われるにもかかわらず、その多くは、直接農民に利益をもたらさしめない。われわれは、このことをつねに忘れてはならない。

われわれが搾取について語るときには、資本家をつねに頭に思い浮かべるが、海にはいろんな魚がいることを忘れるべきではない。魚はお互いに食い合う。大きな魚は小さな魚を食べ、小さな魚はさらに小さい魚を食べる。わが国民を区別するため、二つの可能な方法がある。われわれは、一方の側に資本家と封建主義者をおき、そして他方の側に農民と労働者をおくことができる。しかし、われわれはまた、一方の側に都市居住者をおき、他方の側に農村地域に住む人々をおくことができる。もしわれわれがよほど注意ぶかくなければ、タンザニアにおけるほんとうの搾取者は、農民を搾取する都市居住者である、と



いう結論に到達しかねないのである。

### 人民と農業

国の発展は、金によってではなく、人民によってもたらされる。金とそれが表示する富は、発展の結果であって、基礎ではない。発展のための四つの必要条件とは、次のようなものである。それらは(1)人民、(2)土地、(3)すぐれた政策、(4)卓越した指導である。わが国には一〇〇〇万<sup>(原注)</sup>余の人民がおり、三六万二〇〇〇平方マイル余の面積がある。

(原注)一九六七七年のセンサスによれば一、二三〇万人である。

### 農業は発展の基礎である

タンザニアの国土の大部分は肥沃であり、雨量も十分である。わが国は国内消費および輸出のために、各種の作物を生産できる。

われわれは、トウモロコシ、米、小麦、豆類、落花生などの(もし大量に生産するならば輸出することもできる)食用作物を生産することができる。そしてサイザル麻、綿花、コーヒー、タバコ、除虫菊、紅茶などの換金作物も生産できる。わが国の土地はまた、牛、山羊、羊を放牧し、にわとりなどを飼育するのにも適している。われわれはわが国の川、湖そして海から、大量の魚を獲ることができる。わが国のすべての農民は、上にあげた食用作物や換金作物のうち、二ないし三種類あるいはそれ以上

上を生産しうる地域に住んでいる。そしてそれぞれの農民は、より多くの食料やより多くの金を手に入れようと思うならば、彼の生産を増大することもできるのである。そして、発展の主要目標は、より多くの食料や、その他の必要をみたすためのより多くの金を獲得することであるのだから、われわれの目標は、これら農作物の生産を増大することではなければならない。実際、これがわが国を発展させる唯一の道である——言いさえれば、これらの物を増産することによってのみ、われわれはタンザニアのあらゆる人々のために、より多くの食糧とより多くの金を獲得することができるのである。

### 発展の諸条件

#### (a) 勤勉

すべての人々が発展をのぞんでいる。しかし、すべての人々が発展のための基本的な必要条件を理解し、それを受けいれていくわけではない。もっとも重要な必要条件は勤勉である。村に行き、人々と話そう。そして彼らがもっと勤勉に働くことができるかどうかをたしかめよう。

たとえば都市の賃金労働者はふつう、一日に七時間半か八時間、週に六日か六日半働いているのである。これは二ないし三週間の休暇をのぞけば、年間を通して週約四十五時間である。言いかえれば、このことは賃金労働者が週四十五時間、年四十八ないし五〇週働いていることになるのである。



われわれのような国にとって、この労働時間はじつに短かすぎる。他の国々では、われわれよりもっと発展した国々でさえ、人々は週四十五時間以上働いている。新生国家がこのような短い労働時間で建国に着手するのは異例である。最初は長い労働時間に耐え、国が繁栄するにつれてそれを減らしていくのが通例である。短時間労働に甘んじ、しかもさらに労働時間を短くすることを願うというのは、開発諸国をまねているのである。そして、われわれはこの模倣を後悔することになるだろう。それにもかかわらず、賃金労働者は週四十五時間は働いており、しかも彼らの年間休暇は四週間を越えることはない。

わが国の農民に、とりわけ男性に、一週間に何時間、一年間に何週間働いているか尋ねてみるとよい。多くの者は、賃金労働者の半分の時間も働いていない。実は、農村では女性の方がよく働くのである。ときには、彼女たちは一日に十二ないし十四時間も働く。彼女たちは日曜日や祝祭日も働いている。農村に住んでいる女性は、タンザニアのそれよりもよく働いている。農村に住んでいる男性（そして都市に住んでいる女性のある者）の生涯の半分は休暇である。農村に住んでいる数百万の男たちや都市に住んでいる数千の女たちは、現在ゴシップやダンス、酒にその活力を浪費しているが、その活力こそ、手に入れることのできる何物にもまして、わが国の発展により貢献しうる偉大な宝であるはずなのである。

われわれが村に行つて、かれらがこのような宝を持つており、そして、かれら自身の利益とわが国全体の利益のためにそれを用いるのはかれらの義務であると人々に語りかけることは、わが国にとってたいへん有益なことである。

#### (b) 知性

発展の第二の条件は知性をはたらかすことである。知性をはたらかさずにがむしゃらに働いたとしても、両者が結びついたときほどの成果をもたらさないであろう。小さい鋤くわのかわりに大きな鋤を使うこと、ふつうの鋤のかわりに牛で引いた犁すまの使用、肥料の使用、殺虫剤の使用、特定の季節または土壌に適した作物を理解すること、栽培に適した種子を選ぶこと、栽培や除草などの適当な時期を理解すること等々。これらはすべて、知識と知性の活用 の例である。そしてこれらすべては勉強とむすびついて、より大量、かつより良質の成果を生み出すのである。

われわれがこの知識を農民に伝えるために費やす資金と時間は、われわれが開発と呼んでいる他のことに費やす資金と多くの時間とくらべて、よりよい使い途であり、しかもわが国により多くの利益をもたらすものである。

これらの事実を、われわれ全員がよく知っていることである。わが国の五カ年開発計画のうち、現在目標に到達し、あるいはすでに目標を超えた部分は、人々の勤勉にもっぱら依存し

ているのである。綿花、コーヒー、カシューナッツ、タバコ、除虫菊の生産は、過去三年間に、著しく増大した。しかし、これらは、多額の資金を使ってではなく、人々の勤勉と正しい指導によって生産されるものである。

それだけではなく、人々は自らの勤勉さとわずかばかりの援助と指導によって、村における多くの開発計画をなしとげたのである。かれらは学校、診療所、コミュニティー・センターや道路を建設した。かれらは井戸、水路、家畜の水浴び場、小規模のダムを掘り、そしてそのほかさまざまな開発計画を成しとげてきた。もしかかれらが資金を待っていたならば、かれらは現在これらのものを利用することはなかったであろう。

#### 勤勉は発展の根源である

資金に依存している計画のいくつかはうまく行っているものもあるが、資金不足のために中止されたものも多くあり、また完了がおぼつかないものもある。それでもなお、われわれは資金について語り、ますます資金さがしに熱中して、われわれの精力のほとんどすべてを費している。われわれは、実際に必要な資金を得るための努力を減らすべきでない。しかし、開発資金を求めて長期間を要し、費用の多くかかる海外旅行にたびたび出かけるよりも、村に行つて、自分たち自身の努力によつていかにして発展をもたらすかということを示すために時間をを用いる方が、われわれにとってより適切であろう。これ

が、わが国のすべての人々に発展をもたらす真の道である。

このことは何も、これからわれわれは資金を必要としないとか、資金を必要とするような産業は起こさないとか、開発計画に着手しない、とかいうことを意味しているのではない。また、われわれは開発のために外国から資金を受入れないとか、あるいは求めさえもしない。などと言っているのではない。われわれの言っていることは、そういうことではない。われわれは資金を利用しつづけるだろう。そして毎年、われわれは前年に使ったよりも多くの資金をさまざまな開発計画に使用するだろう。というのは、これがわれわれの発展の指標の一つだからである。

しかしながら、われわれの言っていることは、これから先われわれは、発展の基礎が何であり、その成果は何であるかということを認識するであろうということである。資金と人民の関係についていえば、人民とかれらの勤勉は発展の基礎であり、資金はその勤勉の成果の一つである、ということは明らかである。

これからさきは、われわれは、この問題を逆の関係にみるよりも「この問題を足が上で頭が下という倒錯した関係にみるよりも」、まっすぐに立つて自らの足で前進するだろう。産業も資金も入ってくるだろうが、しかし、その基礎は人民とかれらの勤勉であり、とりわけ農業においては、このことははっきりしている。これが自力更生の意味である。したがってわれわれ

の重点は以下の点にある。

- (a) 土地と農業
- (b) 人民
- (c) 社会主義と自力更生の政策
- (d) すぐれた指導

(a) 土地

タンザニアの経済が農業と牧畜業に依拠し、これからも依拠しつづけることを考えると、タンザニア国民は、もしその土地を適切に利用するならば、外部からの援助にたよることなく十分に生活できる。土地は人間生活の基礎であり、すべてのタンザニア国民は将来の発展のための価値ある投資としてそれを利用すべきである。土地は国民のものであるから、政府は、土地が一個人または一握りの人々の利益のためにではなく、国民全体の利益のために利用されているように監視しなければならぬ。

国が十分な食糧と輸出入換金作物を生産しているかを監視するのは、TANUの責任である。国民が近代農法に必要な道具、訓練、指導を得られるように監視するのは、政府と協同組合の責任である。

(b) 人民

自力更生の政策を適切に遂行するために、人民は自力更生の意味とその実践について学ばなければならぬ。人民は食糧、実用的な衣服、良い住宅を自給できるようにならなければならない。

ない。

わが国においては、労働は誇るべきことであり、怠惰、酒びたり、安逸は恥ずべきことである。そしてわが国の防衛のためには、われわれを破壊することを目的とする外国の敵によって利用される国内の手先にたいして警戒を怠らぬことが必要である。人民はつねに、かれが要請されるときにいつでも自分の国を防衛する用意がなければならない。

(c) 良い政策

われわれの自力更生政策の諸原則は、われわれの社会主義政策と歩調をあわせて進められる。搾取を阻止するためにはすべての人々が労働し、自分の働きによって生活することが必要である。そして国の富を公平に分配するためには、すべての人々が最大の能力を発揮して働くことが必要である。誰であれ、自分の親類のところへ長期間働きもせず居すわるべきではない。というのは、そうすることで、かれは親類を搾取することになるからである。同様に、働けば自分の親類を搾取せずに自立できるにもかかわらず、都市や農村でぶらぶら暮らすことは誰にも許されるべきでないのである。

TANUは、自分の国を愛するものは誰でも、タンザニアの国民の利益のために国を建設するにあたって、仲間と協力することによって国に奉仕する義務をもっているものと信ずる。われわれの独立と国民の自由を守るために、われわれは可能なあらゆる方法によつて自立し、外国の援助に依存することを避

けねばならない。もしあらゆる個人が自立すれば、十軒単位の細胞 (Nyumba Kumi Kumi——十すつの家、とよび、国家の最小の生活組織であり、代表はTANU党員から選出される。そこに参加した場合はニエレレ大統領もその代表の指示にしたがう。) が自立することになるだろう。もし各細胞が自立すれば、その地区が自立することになる。もしその地区が自立すれば、地域が自立することになる。もし各地域が自立すれば、そのときはその地方 (県にあたり、タンザニアは二〇の地方からなる) が自立することになり、もし地方が自立すれば、そのときは国全体が自立することになる。そしてこれがわわれわれの目標である。

(d) **すぐれた指導**

TANUは、すぐれた指導の緊急な必要性和その重要性を認識している。しかし、わわれわれは指導者のための組織的訓練をいまだに立案していない。TANU本部は現在、すべての人々にわわれわれの政治・経済上の政策を理解してもらうために、すべての指導者——国家レベルから十軒単位の細胞にいたる——のための訓練計画を立案することが必要である。指導者は生活と行動において、他の人々の模範とならなければならない。

**第四部 TANUの構成員**

党の設立以来、わわれわれはできる限り多くの党員を獲得する

ことに重点をおいてきた。これは、独立闘争中は妥当な政策であった。しかしながら、いまや全国執行委員会は、わわれわれの党の信条と社会主義政策に重点をうつす時期がきたと考えている。

TANU憲章の入党に関する条項は、忠実に守られなければならない。入党志願者が党の信条、目的ならびに規則や規定を受け入れていないように思われる場合には、かれを党員として受け入れるべきではない。とりわけ、TANUが農民と労働者の党であることをつねに念頭に置くべきである。

**第五部 アルーンシャ決議**

以上のべたことにもとづいて、一九六七年一月二六日から一九六七年一月二九日までアルーンシャのコミュニティ・センターで開催された全国執行委員会は、以下のことを決議する。

**A 指導**

1 TANUと政府のすべての指導者は、農民あるいは労働者のいづれかでなければならず、いかなる点においても資本主義的あるいは封建主義的行為と手を結ぶようなことがあってはならない。

2 TANUもしくはは政府の指導者は、いかなる会社の株も所有すべきではない。

3 TANUもしくはは政府の指導者は、いかなる私企業の経

営にも参加すべきではない。

4 TANUもしくは政府の指導者は、二カ所以上のところから俸給を受けとるべきではない。

5 TANUもしくは政府の指導者は、貸家を所有すべきではない。

6 この決議において「指導者」とは以下の地位にある者を意味する。

TANU全国執行委員会委員、閣僚、国会議員、TANU所屬機構の上級職員、政府関係機関の上級職員、TANU憲章の条項にもとづいて任命もしくは選出された者、地方議会議員、および上級ならびに中級幹部の公務員。(ここでいう「指導者」という言葉は本人とその配偶者を意味する。)

#### B 政府および諸公共機関

1 社会主義政策遂行の各段階で、政府がこれまで払ってきた努力にたいして敬意を表する。

2 社会主義に関する大統領の指示を待つことなく、この宣言の第二部にのべられた社会主義政策を遂行するために、さらに進んだ措置をとることを政府に要請する。

3 開発計画を立案するにあたって、政府が現行の開発五カ年計画においてなされてきたように外国からの借款や援助金に依存するのではなくて、むしろその計画を遂行するわが国のもつ能力に重点を置くよう要請する。全国執行委員会はまだ、この計画が自力更生の政策に合致するよう修正されるべきである

と決議する。

4 民間部門における労働者の所得と公共部門における労働者の所得との間にはなほだしい格差が生じないように、政府が手段を講じることを要請する。

5 政府が、農民および農村社会の生活水準を向上させる施策に重点を置くことを要請する。

6 TANU、協同組合、TAPA、UWT、TYL(TANU Youth League TANU青年同盟)およびその他の政府機関が、社会主義と自力更生の政策を遂行するための諸措置をとるよう要請する。

#### C 党員

党員は、かれらが党の理論を理解できるまで徹底した教育をうけるべきである。そして成員はつねに、この原則にしたがって生活することの重要性を思い起こすべきである。

(半沢和夫)

### 3 TANU指針 一九七一年

——ムウォンゴゾ——

#### 序 論

1 現在、わがアフリカ大陸は解放闘争の温床である。この闘



争は、数世紀の間アフリカの資源を搾取し、この大陸の人々を自分たちの道具、奴隷として使役してきた者たちと、自分たちの弱さと搾取を自覚して自らを解放する闘争に参加することを決意したアフリカの人々との間で闘われている。

それはつらくて長い闘争である。ある時は沈黙のうちに闘争は進行し、時に火薬のように爆発し、またある時は人々によって勝ちとられた成功や成果が手のうちからこぼれ落ちていく。

これが多数のアフリカ諸国が独立の旗を掲げた一九六〇年以後のアフリカの歴史である。その年以降、多くのアフリカ諸国の正統な政府が力づくで倒され、新しい政府が立てられた。最近では突発的な政変が武力によってウガンダにひきおこされた。傀儡であるアミンとその手下の兵士たちのグループが、オボテ大統領が指導する革命的なUPC（ウガンダ人民会議）の政府に対して反乱を起こしたのである。

軍隊の多数はこの反乱を認めず、彼らのうちの多くは、ことに高級将校たちは傀儡たちによって殺害された。反乱を歓迎しているのは、統一と社会主義をもたらし部族主義と搾取を根絶しようとするUPCの政策に反対する者たちであることは明らかである。

このような状況ゆえに、わが党はわれわれの革命を守り、結束させ、推進させる政策および戦術をたてるために、タンザニアおよびアフリカの革命の目標を明確にし、この革命の敵を明らかにする義務がある。

2 革命は急激な社会的変化であり、自分たちの利益（および国外の搾取者たちの利益——原文）のために搾取してきた少数者から権力を奪い、それを多数者の手に移して、かれらが自分たちの幸福を追求できるようにする変化である。革命に對立するのは反革命である。すなわち多数者から権力を奪い、民衆の進歩を押しとどめることを目標とする少数者の手に引き渡す、急速かつ突如とした変化である。

3 アフリカの革命にとって最大の目標はアフリカの人民を解放することである。この解放は天から与えられるわけではなく（雨の様に降って来るのではなく）、搾取や植民地主義や帝国主義と闘うことによって勝ちとられるものである。また、解放は専門家やエキスパート（熟練者）によってもたらされるものでもない。辱かしめられ、搾取され、圧迫されているわれわれが、この解放のエキスパートなのである。アフリカ人に自分たちを解放する方法を教えることができるような国は、世界のどこをさがしても存在しない。われわれ自身を解放する義務はわれわれ自身が引き受けなければならないし、そのために必要な技術は「解放闘争の戦略的技術は」闘争そのものの中で獲得されるであろう。

4 さらに、アフリカの現状を見ると、いかなるアフリカの

国家においても、完全な解放の段階を達成した人民は存在しないことがわかる。アフリカはいまだに、搾取され屈辱を加えられてきたことに由来する弱さに苦しんでいる人々の大陸である。それゆえに、TANUのようなアフリカの独立諸国家の革命的政党は、現実にはなお解放運動を継続中なのである。

5 アフリカ人民の真の解放をめざすアフリカの革命は、搾取、植民地主義、新植民地主義、帝国主義の政策と闘っている。植民地主義、新植民地主義、帝国主義のねらいは、アフリカの富がアフリカ諸国自身の利益ではなくて、ヨーロッパやアメリカの資本家の利益のために用いられるようにすることである。それゆえに、アフリカの革命に参加することは植民地主義や帝国主義に対する闘争に参加することである。

6 数世紀にわたってアフリカを搾取し抑圧してきた帝国主義諸国とは、西欧諸国、とりわけイギリス、フランス、ポルトガル、ベルギー、スペインである。これらの諸国家はアフリカを解放するという問題において、現にアフリカの人民の前に立ちふさがっているのである。旧来の搾取を維持し継続したがっているヨーロッパ帝国主義者の陰謀から、アフリカの革命の前進をゆがめようとするさまざまな試みがなされている。

7 タンザニアについて言えば、われわれが立ち向かっている

帝国主義的な敵はイギリス帝国主義であり、ポルトガル植民地主義であり、南アフリカとローデシアの人種主義と人種差別政策であるということを知っておかなければならない。これらの帝国主義者たちは、歴史的、地理的、政治的な口実をつけて、機会さえあれば攻撃をしかけようとしている。

8 ギニア共和国へのポルトガルの侵略は、われわれにとって大きな教訓である。ギニアがポルトガル帝国主義に侵略された第一の理由は、ギニアが平等を実現する政策をとり、搾取に反対したことであり、第二の理由はギニア・ビサウ（旧ポルトガル植民地、苦難にみちた解放闘争のうち、一九七三年に独立を達成）とアフリカの自由の闘士を保護するという誠実な態度をとったことである。それと同じ理由で帝国主義者たちはいつかタンザニアを攻撃しようとするかもしれない。しかしギニアはまた、人民と軍隊が結束すれば、いかなる帝国主義者といえどもかれらの独立をくつがえすことはできないということをわれわれに教えたのである。

9 ウガンダからわれわれが引き出した教訓は、裏切りと反革命に関するものである。それによれば、革命的な政府を転覆するために国家を侵略するかわりに、帝国主義はむしろ地方的な傀儡を利用して正統な政府を転覆し、そのかわりに「親分」や傀儡の政府を据えようとしている。そのような政府は帝国主義

者が地方のブルジョアジーと協力して国民の富を搾取するのを許すだろう。

ウガンダやギニアの事件から学ばなければならぬことは、帝国主義がいまだに強力であるとはいえ、革命的な政府を転覆するためには、その革命を妨害するのを助ける国内の反革命的な傀儡を抱き込まなければ、ほとんど成功の可能性がない、ということである。

10 われわれタンザニアの国民が国家の独立を重視するのは、まさにそのことからわれわれの解放や、他のアフリカ諸国の人民とともに解放闘争を闘う熱意が生まれてくるからである。それゆえにわれわれは、革命を推しすすめ、そしてタンザニアをアフリカの革命の模範にするために、われわれの独立を守ることに必要なあらゆる措置をとる義務がある。

## 政治

### 政党

11 政党の責任は、国家の独立を保ちアフリカ人の解放を前進させる運動において、民衆とかれらのさまざまな組織を指導することである。社会主義政党の義務は民衆のあらゆる活動を導くことである。政府、公社、国民的組織等々は、党の政策を遂行するための手段〔機関〕である。われわれの短い独立の歴史

は、政党がその手段を指導しなかった場合に生じる諸問題を明らかにしている。いまや政党がすべての民衆の行動を指揮し指導する時が来たのである。「いまや政党が大衆のすべての（公的）事業を指導するために、たずなを躊躇なくにぎる時が来たのである。」

12 その指導にとって第一の課題は、国家目標を明確にすることである。この点については理解が得られ、党はすでにこの義務を果たした。われわれの目標はタンザニアに社会主義を建設することである。しかし、この目標を達成するためには、党は人民の活動のさまざまな側面に関する政策と指針を示さなければならぬ。党はすでに、農村地域自助のための教育等々における社会主義の指針を示した。（Education for Self-Reliance, in Julius K. Nyerere, UJAMAA Essay on Socialism, Oxford University Press をよび Socialism and Rural Development, ibid. 参照）だが、さらに住宅、労働者、貨幣、公債政策などのような他の問題についても党の政策を明らかにする必要がある。

13 しかし目標や政策の一覧表は、それ自体がすぐれた指導であるわけではない。指導はまた、人々を組織することを意味する。政府やさまざまな制度〔下部組織〕、軍隊などの構成を決定するのは党なのである。さらに、党は職務の秩序と心構えおよび決定過程についての指針を示すべきである。

現実には、われわれは植民地政府の機構を受け継いでいるだけでなく、植民地的な職務の慣習や指導方法をも踏襲しているのである。たとえば、われわれは政府や工場やその他の組織において、一人の人間が命令を下し、他の者はただそれに従うだけという慣習を受け継いでいるのである。もし仕事の計画を作るときに人々を仲間に入れないならば、その結果はかれらに、この国家組織は自分たちのものではないと感じさせ、そして労働者たちに雇われ人根性を植えつけさせることになる。党はこのような問題における指導を強化する義務がある。

14 民衆を組織することに加えて、指導は党の政策の遂行を監督することも含んでいる。党がその実行機関の活動と運営を積極的に監督できる方法を考え出さなければならぬ。指導はまた政策実行の結果を検討しなければならない。党がその諸機関によって実行された政策の結果を評価できるようにすること、党の義務である。官庁、諸機関、軍隊、村落、工場など、いづれにおいてであれ、人々が自分たちの問題にたいする解答を見出すための、これが唯一の方法なのである。「このことこそが、官庁、工場、軍隊、村落などにおいて、国民自身が自らの問題を解決する方法をみいだすために協力するという正当性をもたらしめる唯一の方法なのである。」

15 人々を自分たちの問題の解決に参加させることのほかに、

指導者たちが職務上および日常生活上身につけている慣習という問題もある。

指導する者と指導される者との間に平等性をつくりあげるためには、慎重な努力が必要である。タンザニアの指導者は傲慢、横暴、侮蔑的、高圧的であってはならない。タンザニアの指導者は人民を尊敬し高慢さをしりぞける人物であり、専制者であってはならない。英雄的行為や華々しさを避け、正義と平等の擁護者でなければならない。

同様に、党はそのメンバーの報復的行為「その組織のいくつかによっておこなわれた抑圧」とたたかう義務がある。そのような行為は社会主義を推進するものではなく、党および政府と人民との間に亀裂を生じさせるものである。

16 現に、これらの条件にあてはまらない「これらの原則を実行しない」指導者たちがいる。かれらは指導者の守るべき規範を無視あるいは巧妙に回避している。党が指導者たちの行為や態度を監督すべき時がきたのである。

#### 外交政策

17 われわれの外交政策は非同盟政策である。われわれは、東西いづれからであれ、われわれと友誼を結ぼうとするいかなる国々とも友好的に協調する用意がある。われわれの外交政策の第二の重要な側面は、アフリカの真の解放運動と関係をつよめ、

たがいに援助しあうことである。前述のように、わが党自身いまだ解放運動を継続中なのである。

現在、アフリカにおいて解放運動は、植民地主義と帝国主義にたいする闘争の先頭に立っている。かれらの闘いはわれわれの闘いであるということを認識して協力関係を強めることによって、われわれはアフリカの完全な解放をもたらす力を倍加するであろう。党はアフリカ、アジアおよびラテン・アメリカの解放運動との革命的な関係を確立するために必要な手段を講じなければならない。

同様に、正義と人間の平等のために闘っているアメリカ市民たちと友好的かつ革命的な関係を確立することも、われわれの義務である。

18 さらに、われわれは革命的なアフリカ諸国との協力と結束を強化する義務がある。なぜならば、われわれはおなじ船に乗り合わせ、われわれの運命は一つだからである。統一と協力とによって、われわれの敵はかれらの常套手段である各個撃破を行なうことができないであろう。

19 国際連合や他の国際機構において、すべての友好的、社会主義的、革命的なアフリカ、アジアおよびラテン・アメリカの諸国との協力を強調する必要がある。

#### ウガンダとEAC（東アフリカ共同体）

20 われわれは東アフリカ共同体の提携諸国家間の協力から生ずる政治的、経済的利益を重視する。それゆえに傀儡アミンがUPCの正統な政府を転覆することによって作り出した現状は、共同体の協力と活動の運営に支障を生ずることによって、おおいにわれわれを妨げている。

もし、現状がこのまま継続するならば、共同体の発展と活動を維持することはきわめて困難になり、東アフリカの協力関係を弱めることになるであろう。党は、ウガンダおよび東アフリカ共同体についての政府の立場を支持する。ウガンダの解放に關係することを決定するのはウガンダ人民の問題であるが、自らを解放しようとするウガンダの兄弟たちの努力を支持することはタンザニア国民の義務である。

#### 防衛および安全保障

「しかも、わが国の防衛のためには、わが国の破壊をもくろんでいる国外の敵の手先になるような国内の傀儡にたいして防衛することが必要である。」

（アルーシャ宣言）

21 タンザニアの発展の基礎は人民自身——すべてのタンザニア国民——とりわけ一人一人の愛国者と社会主義者である。タ



ンザニアの防衛と安全はタンザニア国民自身——すべてのタンザニア国民、とりわけ一人一人の愛国者と社会主義者の肩にかかっている。

22 もしわが党が解放戦争に従事しなければならない場合には、TANUのすべての構成員は、軍隊の中であれ、他のどこにおいてであれ、兵士となるであろう。TANUの構成員であると同時に兵士になるのである。党が解放運動を行なうだけではなく、軍隊もまた解放軍となる——解放運動を指揮し擁護するのである。「楯でありヤリである」

23 わが党は解放戦争をたたかうことを強要されはしなかった。解放軍のない解放運動であった。しかし一九六四年以来われわれはタンザニア人民防衛軍を組織してきた。そしてTANUがいまだ解放運動を継続中であるように、タンザニア人民解放軍はタンザニア国民の解放軍なのである。

TANUとTPDF（タンザニア人民防衛軍）の関係は、人民の政党と人民の軍隊との関係である。人民の軍隊が人民の解放と防衛のための軍隊であることを保障するのはTANUの責任である。平和時における軍隊の主要な課題は、国民がその独立と自分たちの社会主義および自助の政策とを守ることを可能にすることである、ということを保証するのもTANUの責任である。

24 国家中央委員会はアルーシャ宣言の実行、ことにすべてのタンザニア国民がわが国の置かれている状況と国家の安全と人民の生活を守ることの重要性、およびわが国の政治、独立、経済、文化を守ることの重要性を理解するために政治意識を喚起することの必要性を強調している。

25 政治教育「政治の覚醒」は、わが国の敵と、かれらがわが国の政治、独立、経済、文化を転覆するためにとる戦術を人々に認識させなければならない。人民が敵に立ち向かうためには、たとえば軍隊、商業戦略、生活と習慣、そしてそれらがわれわれの確信および情熱との間にどのような闘争を引き起こすかなど、すべての領域にわたって敵の強さを人民に認識させる必要がある。

26 人民がわれわれの敵に立ち向かうためには、人民は自分たちこそ国家の楯であるということを知らなければならない。このことはつまり、防衛と安全に関する事は人民自身の手の中になければならないということである。われわれは国家全体を防衛する巨大で恒久的な軍隊を持つことはできない。われわれの軍隊は人民の軍隊でなければならず、人民に自分たちの地域でみずからの力によってどのように防衛するかを教え、またかれらに国家の安全に関する事柄を報告できるように教えることによって、そのような軍隊を作ることができるのである。それゆ

えに、全国的に国民軍を養成し始めることが緊急に必要である。国民軍が正規軍と協力関係を保ちながら国内全体に拡がったならば、国民軍は正規軍と緊密に協力しながら、わが国境と空域を守り、裏切り者と敵を曝く義務がある。

#### 党が軍隊を指導する

27 国民軍と軍隊の採用登録は慎重に審査され、党による監督をうけなければならない。軍隊と国民軍との協力関係を保ち、両者に政治教育を施すことは、党のもっとも重要な責任でなければならない。党は中央委員会の下部委員会を設置し、防衛と安全保障を検討しなければならない。

#### 経済と進歩

「国家の発展は人民によってもたらされる。」

(アルーシャ宣言)

#### 人民の進歩

28 植民地主義や資本主義によって隷属化され、抑圧され、搾取され、屈辱を与えられてきた人々にとって、「発展」とは「解放」を意味する。自分たち自身のことについての決定権を強めるような行為は、たとえそれが健康や食生活を改善しなくても、発展のための行為なのである。かれら自身のことを決定した

り、かれら自身の生活を運営するための発言権を減ずるような行為は、たとえそれがわずかばかり健康と食生活を改善するとしても、発展ではなく、人々を後退させるものである。

われわれにとって発展とは抑圧、搾取、奴隷化、屈辱からの解放を意味すると同時に、独立と人間の尊厳をより確固たるものにすることを意味している。それゆえにわが国の発展を考え、発展計画を作成する場合には、われわれの重点はつねに物ではなくて人々の発展に置かれなければならない。発展が人民の利益になるものであるならば、人民は自分たちの発展計画を考慮し立案し実行することに参加しなければならない。

わが党の義務は、少数の専門家や指導者たちによって決定された計画を実行するように人民をせきたてることではない。わが党の義務は、人民自身によって合意された計画を指導者や専門家たちが実行するように保証することである。人民が決定を下す際に、指導者や専門家たちだけに使用可能な情報を要求された場合には、そのような情報を人民に使用可能にすることが指導者や専門家たちの義務である。指導者や専門家たちが、ただだんに自分たちが専門知識を持っているからといって人民の決定権を侵すことは誤りである。

29 人民が自分の国の防衛に熱意を持つためには、TANU政府はかれらの置かれている環境〔経済状況〕を改善することに大いに重点を置くことがとりわけ重要である。

多くの人々を経済の主流からしめ出してきた旧来の「植民地主義者からうけついで」経済構造は、開発支出を押し上げ、すべての地域に投資を拡張するような計画に、ただちに置き代えられなければならない。地域開発基金は、経済活動を盛んにし、人民に目に見える利益をもたらすことに寄与してきた。政府の財政支出を承認する際に、この基金への配分を増し、この支出を最重要視することは有益であろう。党は、さまざまな国家建設計画に人々が参加すべきであることを強調しなければならぬ。

#### 貯蓄

30 自分の金をただためこむかわりに、貯蓄銀行や国立商業銀行のような国家機関に貯金することの重要性を人民に教育することも党の義務である。

#### 国民経済

31 人民の発展を考えると、現在は国内経済を確立し発展させることが必要である。このことは第二次五カ年開発計画の中でも言及されたが、その実行は強調されず、それゆえにまだ成果は現われていない。また、この国で生産されるものは不必要な国際競争から保護されなければならない。

32 わが国の貿易において、われわれはわが国の経済に寄与しないような品目を買うために外貨を使うことのないようにしなければならない。政府とその行政団体が模範を示さなければならない——それは現在実践されているとはいえない。わが国の輸入業者にわれわれの社会主義と自助政策にふさわしい指針が与えられなければならない、そしてその指針は守られなければならない。外貨の不足がわが国の経済を弱め、わが国の独立を危うくするものであるということを、すべてのタンザニア国民とりわけ指導者は忘れてはならない。

#### 公社

33 公社の行為と活動は、それらがよりいっそうわが国の社会主義と自助の政策を推進するように監督されなければならない。公社の活動は満足を生み出すものであり、不満を生ずるものであってはならない。党は、公社が国民経済全体の発展に寄与しないような品目のために、浪費しないようにしなければならない。

#### 剰余金

34 政府は、公社の経済活動から生ずる剰余金の支出を、監督し指導しなければならない。

35 「われわれは極端に抑圧され、極端に搾取され、極端に無

視されてきた。われわれが抑圧され、搾取され、無視されてきたのは、われわれの弱さゆえであった。いまや、われわれは革命をのぞんでいる——われわれの弱さに終止符を打ち、ふたたび搾取され、抑圧され、屈辱を受けるようなことがなくなるよ  
うな革命を、である。」  
(五十嵐暁郎)

会員紹介

古沢紘造 (貿易論 駒沢大学経済学部助教授、在タンザニア)

古沢貞子 (在タンザニア)

半沢和夫 (農業経済学 日本大学大学院博士課程、ケニアに一年間在住)

佐藤正市 (経済学 駒沢大学大学院修士課程)

牛久保滋 (スワヒリ文学 タンザニアに二年間在住)

五十嵐暁郎 (政治学 神奈川大学法学部講師)